安曇野市の埋蔵文化財第７集

平成24年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書

明科遺跡群栄町遺跡（第４次）

2014. 3

安曇野市教育委員会

調査区全景（上が南）

SB1カマド遺物出土状況

SB2カマド遺物出土状況

SB2出土土器

序

西に雄大な北アルプスがそびえ、この山々から流れ出す清らかな水が盆地を潤す風光明媚な安曇野は、往古から人々の生活の舞台となってきました。現在、安曇野市では約400箇所の埋蔵文化財包蔵地の存在が知られており、現代に生きる私たちが先人たちの営みの痕跡をうかがい知ることができます。

安曇野市教育委員会では平成23年度から安曇野市明科総合支所建設工事に先立ち発掘調査・工事立会等の遺跡保護を継続してきました。この場所は以前から栄町遺跡として知られており、旧明科町時代にも周辺の調査が行われています。今回、発掘調査を実施した一帯は明治時代末に官営製材所がおかれた場所でもあります。このため遺跡の発掘調査前は残存状況が危惧されていました。しかし、調査の結果、残存状況は良好で古墳時代後期の集落跡の一端が確認されるという大きな成果を上げました。

最後になりますが、本書をまとめるにあたり、多くの諸氏、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成26年（2014）３月

安曇野市教育委員会
教育長　須 澤 眞 廣

例　　言

1　本書は長野県安曇野市で平成24年度に実施された埋蔵文化財保護事業及び明科遺跡群 栄 町 遺跡（以下、「栄町遺跡」とする。）（第４次）発掘調査報告書である。

2　本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施した。調査体制は各章のとおりである。

3　本書の編集は安曇野市教育委員会事務局が行った。執筆は土屋和章が担当し、山下泰永が統括した。また、自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。

4　本書で使用した主な引用・参考文献は巻末に一括して掲載した。ただし、業務委託した自然科学分析については分析の文末に引用・参考文献を掲載している。

5　本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。

6　調査全般にわたり以下の方々からご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。（敬称略・五十音順）

安曇野市豊科郷土博物館、大澤　慶哲、桐原　健、長野県教育委員会、百瀬　新治、山田　真一

凡　　例

1　発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2012年）の組み合わせである次の表記を使用した。

明科遺跡群栄町遺跡（第４次）：SC12

2　調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。

SB：竪穴建物跡・竪穴状遺構　SD：溝状遺構　SF：焼土遺構　SK：土坑　ST：掘立柱建物跡
SX：性格不明遺構　P：ピット

3　遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（　　）で示した。

4　本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。

土師器：断面無地　　須恵器：断面黒塗　　黒色処理：トーン（薄）

5　土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。

目　　次

序
例言・凡例
目次・挿図目次・表目次
第１章　平成24年度埋蔵文化財保護事業……1
　1　埋蔵文化財保護事業の概要……1
　2　試掘調査等……6
第２章　栄町遺跡（第４次）発掘調査……15
　1　調査の契機と経過……15
　2　遺跡の位置と環境……17
　3　調査の方法と成果……22
　4　基本土層……23
　5　遺構……24
　6　遺物……28
　7　自然科学分析……39
　8　調査の総括……45
　写真図版……49
引用・参考文献
報告書抄録

挿図目次

第１図　平成24年度発掘調査等位置図……２
第２図　等々力町巾上巾下遺跡試掘位置図……６
第３図　光城跡試掘位置図……６
第４図　穂高高校北遺跡試掘位置図……７
第５図　穂高古墳群 B14号墳付近試掘位置図……７
第６図　田多井北村遺跡遺構確認位置図……８
第７図　試掘対象範囲……８
第８図　田多井北村遺跡試掘出土土器……９
第９図　来光寺跡試掘位置図……11
第10図　穂高高校北遺跡試掘位置図……11
第11図　南松原遺跡試掘位置図……12
第12図　チンクラ屋敷遺跡付近試掘位置図……12
第13図　試掘位置図……13
第14図　馬場街道遺跡試掘位置図……13
第15図　馬場街道遺跡試掘出土土器……14
第16図　栄町遺跡付近の遺跡……18
第17図　発掘調査位置図……19
第18図　栄町遺跡グリッド配置図……21
第19図　発掘調査区全体図……22
第20図　基本土層……23
第21図　SB1遺構図……25
第22図　SB2遺構図……26
第23図　SX1遺構図……27
第24図　SB1出土土器・土製品……31
第25図　SB2出土土器（その１）……32
第26図　SB2出土土器（その２）……33
第27図　SB2出土土器（その３）……34
第28図　集石長幅比……34
第29図　石製品（その１）……35
第30図　石製品（その２）……36
第31図　暦年較正結果（１σ）……42
第32図　炭化材……44
第33図　栄町遺跡付近の遺構確認・遺物出土地点……48

表目次

第１表　平成24年度発掘調査等一覧……４
第２表　田多井北村遺跡試掘出土土器観察表……９
第３表　馬場街道遺跡試掘出土土器観察表……14
第４表　栄町遺跡付近の遺跡……18
第５表　栄町遺跡発掘調査記録……20
第６表　竪穴建物跡観察表……27
第７表　栄町遺跡出土土器観察表……37
第８表　栄町遺跡出土土製品観察表……37
第９表　栄町遺跡出土石製品観察表……37
第10表　栄町遺跡出土集石観察表……38
第11表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果……41
第12表　樹種同定結果……41
第13表　栄町遺跡出土土器遺構別集計表……46

第１章　平成24年度埋蔵文化財保護事業

１　埋蔵文化財保護事業の概要

事務局の体制

平成24年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業は、教育委員会事務局文化課文化財保護係が担当した。体制は次のとおりである。

事務局　安曇野市教育委員会事務局　文化課

三澤　良彦（文化課長）

那須野　雅好（文化財保護係長、～平成24年９月）、山下　泰永（文化財保護係長、平成24年10月～）、逸見　大悟、土屋　和章（文化財保護係）

地理的環境と遺跡の立地

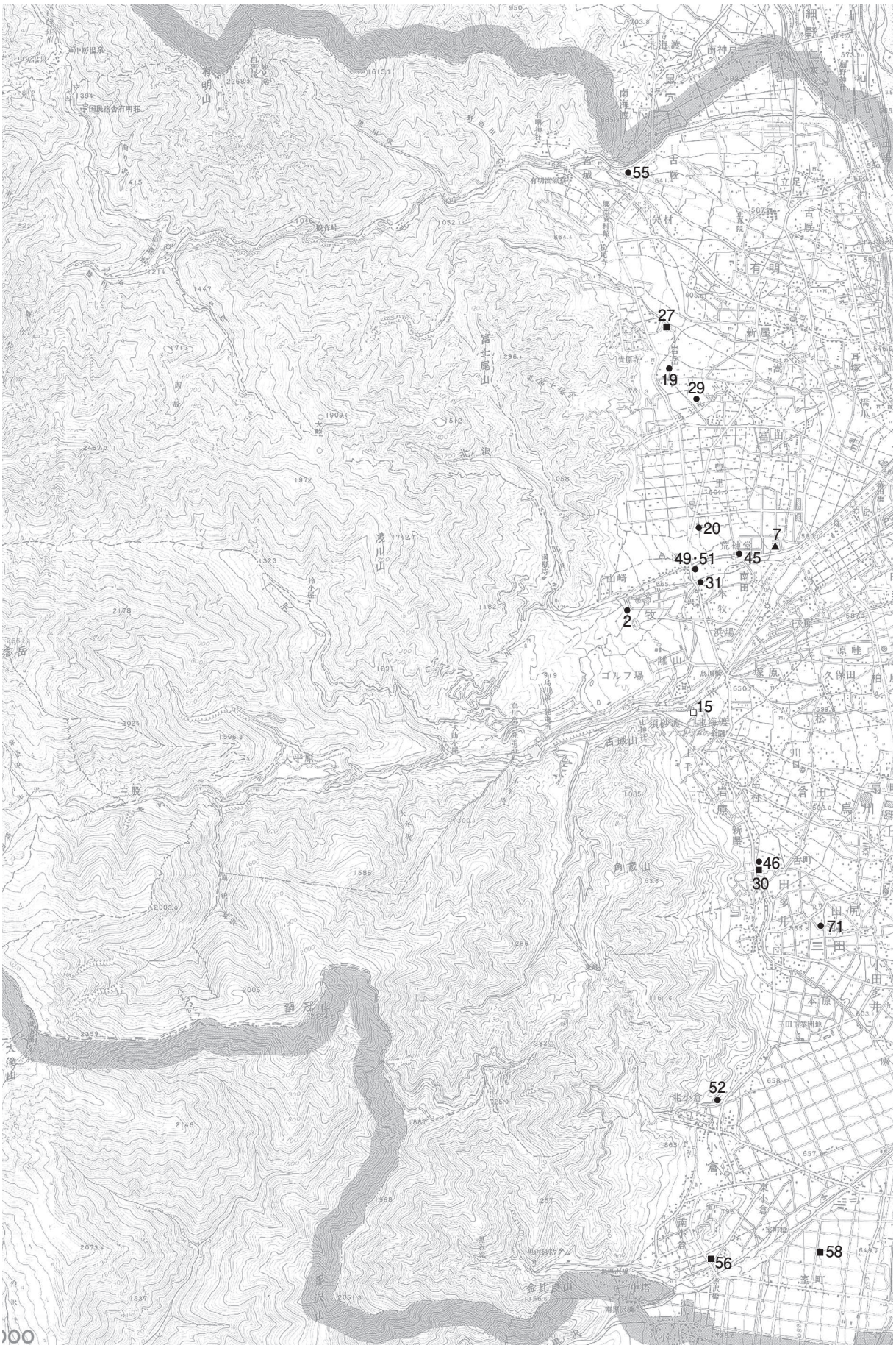
安曇野市は平成17年（2005）10月１日に豊科町（とよしなまち）・穂高町（ほたかまち）・三郷村（みさとむら）・堀金村（ほりがねむら）・明科町（あかしなまち）の５町村が合併して誕生した市で、長野県のほぼ中央部に位置し、北は大町市（おおまちし）、松川村（まつかわむら）、池田町（いけだまち）、生坂村（いくさかむら）、筑北村（ちくほくむら）、南は松本市（まつもとし）に隣接する。地形的には松本盆地の中ほどにあり、西は飛騨（ひだ）山脈、東は筑摩（ちくま）山地と接する。松本盆地は構造性の盆地で、縁辺部から流れるいくつもの河川が運搬した堆積物により形成されている。

安曇野市内に所在する遺跡は現在約400箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、確認されている時代としては縄文時代早期から現代に至る。縄文時代の遺跡は、主として北アルプス山麓の扇状地扇頂付近及び犀川以東の河岸段丘上に多く立地しており、過去の調査からは縄文中期に隆盛を極めたことがわかる。弥生時代になると遺跡数は減少し、集落の立地も扇状地扇端へ移る。生業形態の変化が遺跡立地の変遷に影響している可能性があり、この集落立地は基本的に現代まで踏襲されている。安曇野市では前・中期の古墳は現在までに確認されておらず、後期の群集墳が北アルプス山麓や明科地域に分布する。奈良時代以降は、前代までの立地を踏襲するように犀川以西の扇端と犀川以東の河岸段丘上に集落が営まれるなか、明科地域では明科廃寺と呼称される古代寺院の存在が確認されている。また、豊科田沢の山間部一帯から隣接する松本市域にかけて須恵器窯群が築かれている。

平成24年度の概要

平成24年度の安曇野市における埋蔵文化財保護措置の一覧は第１表のとおりで全77件であった。このうち安曇野市教育委員会が主体となって実施した発掘調査等は合計76件で、内訳は発掘調査１件、試掘調査11件、工事立会61件、慎重工事３件となっている。それぞれの位置は第１図に示す。試掘調査の概要は次項で取り上げた。

また、安曇野市教育委員会が調査主体となった埋蔵文化財保護事業のほかには、國學院大學文学部考古学研究室によって穂高古墳群 F9号墳の学術発掘が実施されている（吉田・中村編2013）。



第１図　平成24年度発掘調査等位置図

72
38
60
43
5
61
54
11・22・28・73
75
9
70
24
50・65
21
16
3・23
32
41
1
26
10・13
25
34・53
12
6・14・48
36・69
66
37
68
67
47・63
40
62
8
44
74
4
18
77
59
39
35
33
17
42
57
76
64
□発掘調査
■試掘調査
●工事立会
▲慎重工事

第１表　平成24年度発掘調査等一覧

No.	調　査	遺　跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至	調査主体
● 1	工事立会	穂高高校北遺跡	穂高6699番８	個人住宅	20120409	20120409	市教委
● 2	工事立会	新林遺跡	穂高牧1872番６	個人住宅	20111115	20120413	市教委
■ 3	試掘	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4627番１	その他の建物	20120416	20120416	市教委
■ 4	試掘	光城跡	豊科光2194番イ	その他の建物	20120511	20120511	市教委
● 5	工事立会	中木戸遺跡	明科七貴4160番１の一部	個人住宅	20120524	20120524	市教委
● 6	工事立会	三枚橋遺跡	穂高柏原1691番11	宅地造成	20120606	20120606	市教委
▲ 7	慎重工事	空保木城跡	穂高有明1989番２先外	その他開発	20120607	20120607	市教委
● 8	工事立会	中在地遺跡	穂高608番４	個人住宅	20120604	20120611	市教委
● 9	工事立会	やしき遺跡	明科七貴6215番１	個人住宅	20120626	20120626	市教委
■ 10	試掘	穂高高校北遺跡	穂高6786番１外１筆	個人住宅	20120626	20120626	市教委
● 11	工事立会	栄町遺跡	明科中川手6814番１	その他の建物	20120612	20120711	市教委
● 12	工事立会	追堀遺跡	穂高6752番１外１筆	個人住宅	20120713	20120713	市教委
● 13	工事立会	穂高高校北遺跡	穂高6786番１外１筆	個人住宅	20120713	20120713	市教委
● 14	工事立会	三枚橋遺跡	穂高柏原1691番12	個人住宅	20120720	20120720	市教委
□ 15	発掘調査	穂高古墳群 F9号墳	穂高柏原3653番	学術研究	20120804	20120813	國學院大學
● 16	工事立会	辻遺跡	穂高5119番２	学校建設	20120817	20120817	市教委
● 17	工事立会	三柱神社東遺跡	三郷明盛4875番６	その他の建物	20120821	20120821	市教委
● 18	工事立会	町田遺跡	豊科田沢4617番１	個人住宅	20120824	20120824	市教委
● 19	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明275番先外	その他開発	20120827	20120827	市教委
● 20	工事立会	有明巾上遺跡	穂高有明8232番５先外	その他開発	20120827	20120827	市教委
● 21	工事立会	町屋敷遺跡	明科中川手2126番７の一部	その他の建物	20120827	20120827	市教委
● 22	工事立会	栄町遺跡	明科中川手6814番22付近	道路	20120827	20120827	市教委
● 23	工事立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4627番１	その他の建物	20120704	20120831	市教委
● 24	工事立会	中沢古屋敷	明科中川手6484番１先外	ガス・水道・電気等	20120904	20120904	市教委
● 25	工事立会	宗徳寺遺跡	穂高7137番８先外	道路	20120910	20120910	市教委
● 26	工事立会	北才の神遺跡	穂高2494番14	個人住宅	20120912	20120912	市教委
■ 27	試掘	穂高古墳群 B14号墳付近	穂高有明2186番237	宅地造成	20121003	20121003	市教委
□ 28	発掘調査	栄町遺跡	明科中川手6812番７	その他の建物	20120901	20121005	市教委
● 29	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明3109番５先外	その他開発	20121005	20121005	市教委
■ 30	試掘	田多井北村遺跡	堀金烏川598番１外12筆	農業基盤整備事業	20120820	20121009	市教委
● 31	工事立会	寺前・北田遺跡	穂高牧4340番10先	その他開発	20121015	20121015	市教委
● 32	工事立会	宮脇遺跡	穂高10108番３外１筆	個人住宅	20121015	20121015	市教委
● 33	工事立会	日光寺跡	豊科1360番	その他開発	20121015	20121015	市教委
● 34	工事立会	藤塚遺跡	穂高6765番１	公園造成	20121022	20121022	市教委
● 35	工事立会	上手木戸遺跡	豊科高家3581番１外６筆	土砂採取	20121024	20121024	市教委
▲ 36	慎重工事	三枚橋遺跡	穂高柏原966番３	その他の建物	20121026	20121026	市教委
● 37	工事立会	矢原権現池遺跡	穂高1351番１	宅地造成	20121011	20121031	市教委
● 38	工事立会	源藤平遺跡	明科南陸郷1267番１外34筆	その他農業関係事業	20121105	20121105	市教委
▲ 39	慎重工事	上手木戸遺跡	豊科南穂高168番３	公園造成	20121107	20121107	市教委
■ 40	試掘	来光寺跡	豊科南穂高4985番１外	道路、公園造成	20121112	20121112	市教委
■ 41	試掘	穂高高校北遺跡	穂高6867番２	宅地造成	20121112	20121112	市教委
● 42	工事立会	上総屋敷遺跡	三郷温2040番５付近外	道路	20121114	20121114	市教委

No.	調　査	遺　跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至	調査主体
● 43	工事立会	塩川原上ノ平遺跡	明科七貴7636番	その他開発	20121115	20121115	市教委
● 44	工事立会	北村遺跡	明科光491番１外２筆	個人住宅	20121116	20121116	市教委
● 45	工事立会	荒神堂遺跡	穂高牧1045番16先外	その他開発	20121121	20121121	市教委
● 46	工事立会	田多井北村遺跡	堀金三田598番１外12筆	農業基盤整備事業	20121126	20121126	市教委
● 47	工事立会	八ツ口遺跡	穂高1816番１外	道路	20121127	20121127	市教委
● 48	工事立会	三枚橋遺跡	穂高柏原1691番15	個人住宅	20121127	20121127	市教委
● 49	工事立会	他谷遺跡	穂高牧975番先外	ガス・水道・電気等	20121128	20121129	市教委
● 50	工事立会	町屋敷遺跡	明科中川手2145番２	個人住宅	20121129	20121129	市教委
● 51	工事立会	他谷遺跡	穂高牧946番１先外	その他開発	20121207	20121207	市教委
● 52	工事立会	鳴沢Ａ遺跡	三郷小倉21番２先外	道路	20121207	20121207	市教委
● 53	工事立会	藤塚遺跡	穂高6735番３外２筆	その他の建物	20121210	20121210	市教委
● 54	工事立会	潮神明宮前遺跡	明科東川手271番１外９筆	道路	20121212	20121212	市教委
● 55	工事立会	穂高古墳群 A3号墳	穂高有明7554番先外	ガス・水道・電気等	20121213	20121213	市教委
■ 56	試掘	南松原遺跡	三郷小倉1917番	ガス・水道・電気等	20121218	20121218	市教委
● 57	工事立会	栗の木下遺跡	三郷温2202番２	その他の建物	20121218	20121218	市教委
■ 58	試掘	チンクラ屋敷遺跡付近	三郷小倉4496番１	ガス・水道・電気等	20121218	20121218	市教委
● 59	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高242番１先	道路	20121221	20121221	市教委
● 60	工事立会	塩川原遺跡	明科七貴8052番１	個人住宅	20121221	20121221	市教委
● 61	工事立会	浦田遺跡	明科東川手880番２	その他の建物	20121226	20121226	市教委
● 62	工事立会	矢原宮地遺跡	穂高742番付近	道路	20130108	20130108	市教委
● 63	工事立会	八ツ口遺跡	穂高1347番１外２筆	宅地造成	20121129	20130110	市教委
■ 64	試掘	遺跡外	三郷温51番１外15筆	その他の建物	20130110	20130110	市教委
● 65	工事立会	町屋敷遺跡	明科中川手2150番１	店舗	20130116	20130116	市教委
● 66	工事立会	矢原権現池遺跡	穂高996番３付近	道路	20130121	20130121	市教委
■ 67	試掘	馬場街道遺跡	穂高843番１外２筆	店舗	20130208	20130208	市教委
● 68	工事立会	八ツ口遺跡	穂高柏原958番５の内	個人住宅	20130215	20130215	市教委
● 69	工事立会	三枚橋遺跡	穂高柏原969番１外６筆	宅地造成	20130212	20130225	市教委
● 70	工事立会	県町遺跡	明科中川手3815番１	個人住宅	20130228	20130228	市教委
● 71	工事立会	なかじま遺跡	堀金三田1269番２外４筆	その他の建物	20130307	20130307	市教委
● 72	工事立会	中村城跡	明科南陸郷1560番１外	その他開発	20130307	20130308	市教委
● 73	工事立会	栄町遺跡	明科中川手6824番１	その他開発	20130311	20130311	市教委
● 74	工事立会	下里館	明科光841番５	道路	20130315	20130315	市教委
● 75	工事立会	押野八幡宮	明科七貴6942番外	その他開発	20130322	20130322	市教委
● 76	工事立会	平福寺付近古墳	三郷温4188番１外２筆	公園造成	20130325	20130325	市教委
● 77	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高59番６	その他開発	20130326	20130326	市教委

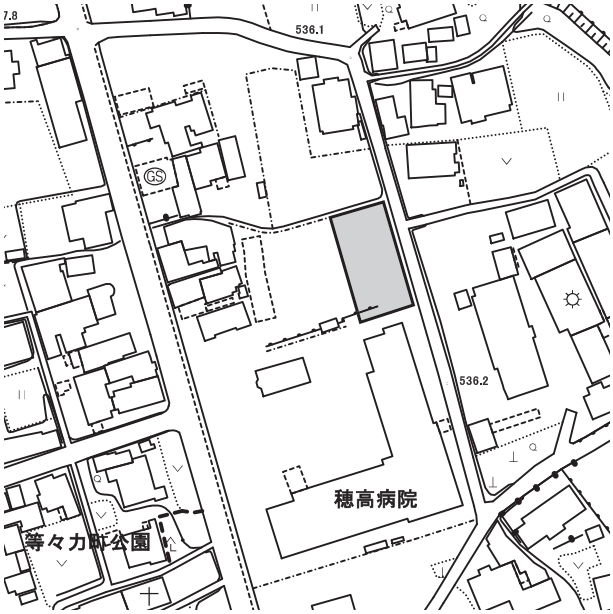
2　試掘調査等

等々力町巾上巾下遺跡（第１表■３）

所 在 地	安曇野市穂高4627番１
調査期間	平成24年（2012）４月16日
調査面積	20㎡
調査契機	その他の建物（病院増築）

概要

今回の調査では開発予定地に試掘トレンチを２箇所設定し、土層及び遺構・遺物の検出を試みた。今回の調査地付近では平成13年度の発掘調査で地表下２ｍ付近から埋蔵文化財が確認されている。このため、この深度まで埋蔵文化財の検出を試みたが遺構等は確認されなかった。なお、観察された土層は砂質シルトと砂礫の互層で河川による自然堆積と考えられる。



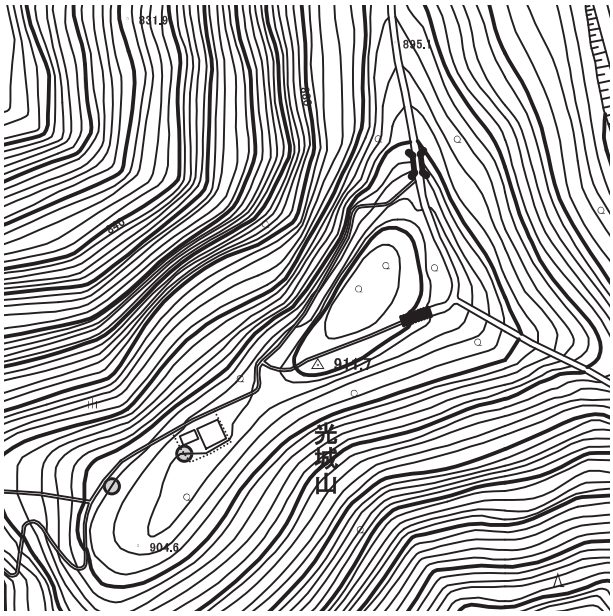
第２図　等々力町巾上巾下遺跡試掘位置図（１／2,500）

光 城跡（第１表■４）

所 在 地	安曇野市豊科光2194番イ
調査期間	平成24年（2012）５月11日
調査面積	２㎡
調査契機	その他の建物（案内看板）

概要

今回の調査では観光用案内看板新設地点と移設地点の２箇所について必要最低限の調査区を設定し土層観察を試みた。この結果、郭縁辺付近の看板新設地点では、深度20～50㎝に存在するシルト層の上に現代のビニール等が混入する層が堆積していた。ここは、切岸に沿う土塁状の高まりになる可能性がある。今回の案内看板設置工事は面積が狭小なため、埋蔵文化財への影響もほとんどなく上記の調査成果が得られたが、今後本遺跡での開発等には留意する必要がある。



第３図　光城跡試掘位置図（１／2,500）

穂高高校北遺跡（第１表■10）

所 在 地	安曇野市穂高6786番１　外
調査期間	平成24年（2012）６月26日
調査面積	３㎡
調査契機	個人住宅

概要

今回の調査では個人住宅建設予定地に調査区を設定し、土層確認及び遺構・遺物の検出を試みた。土地所有者の意向で調査面積は狭小であるが、深度約190㎝までを調査した。この結果、深度70㎝付近及び90㎝付近で微細な土器片の包含を確認している。ただしこれら土器片は採集不可能な大きさであり、主体的な出土とは言えない。なお、この調査区では遺構は確認されなかった。このため、今回の個人住宅建設は埋蔵文化財に影響を与える可能性は少ないと判断される。

第４図　穂高高校北遺跡試掘位置図（１／2,500）

穂高古墳群 B14号墳付近（第１表■27）

所 在 地	安曇野市穂高有明2186番237
調査期間	平成24年（2012）10月３日
調査面積	８㎡
調査契機	宅地造成

概要

今回の調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、一帯が穂高古墳群Ｂ群であり、所在不明となっている B14号墳及び未周知の古墳が存在する可能性があるため事業者の同意のもと試掘調査を実施した。調査地は天満沢川の沿岸であり、河川作用によって運搬された巨大礫が地表に多く露出している。今回の調査によって、調査地所在の古墳の可能性のある高まりはいずれも、これら巨大礫の自然堆積であることが確認された。このため、本件宅地造成は埋蔵文化財に影響を与えないと判断された。

第５図　穂高古墳群 B14号墳付近試掘位置図（１／2,500）

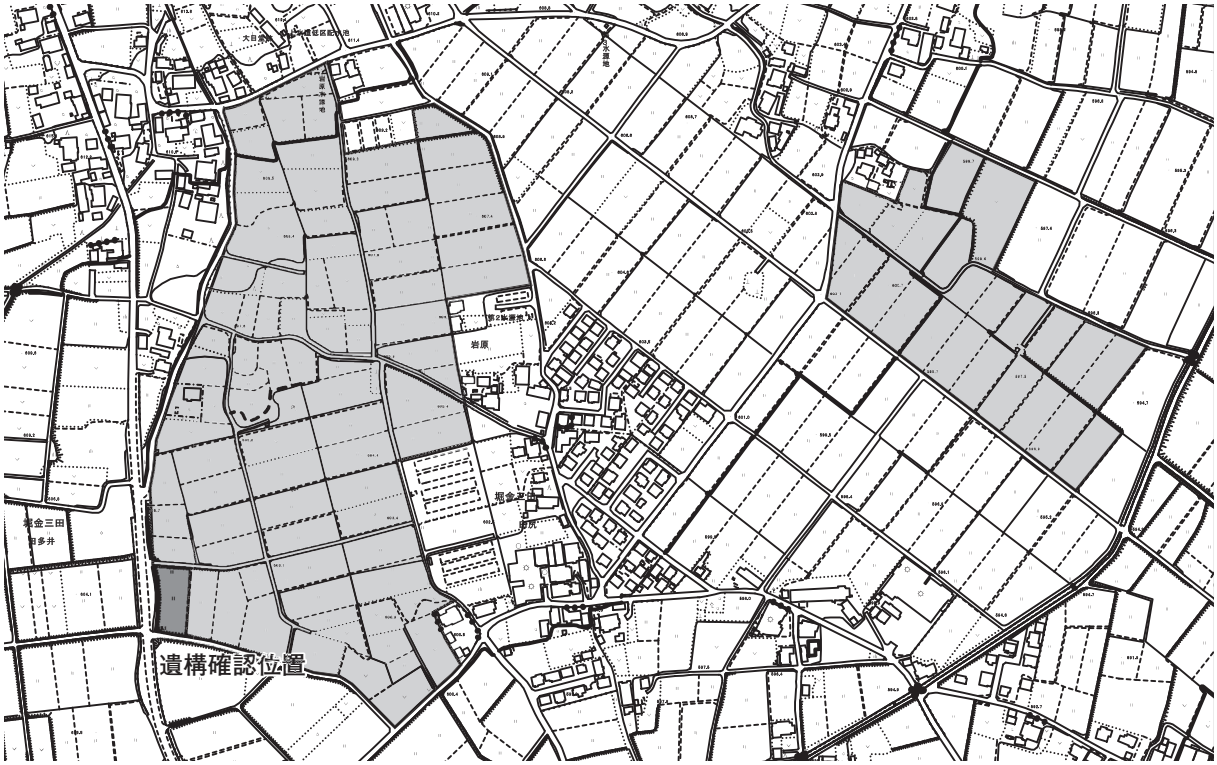
田多井北村遺跡（第１表■30）

所 在 地	安曇野市堀金烏川598番１　外
調査期間	平成24年（2012）８月20日～10月９日
調査面積	160㎡
調査契機	農業基盤整備事業

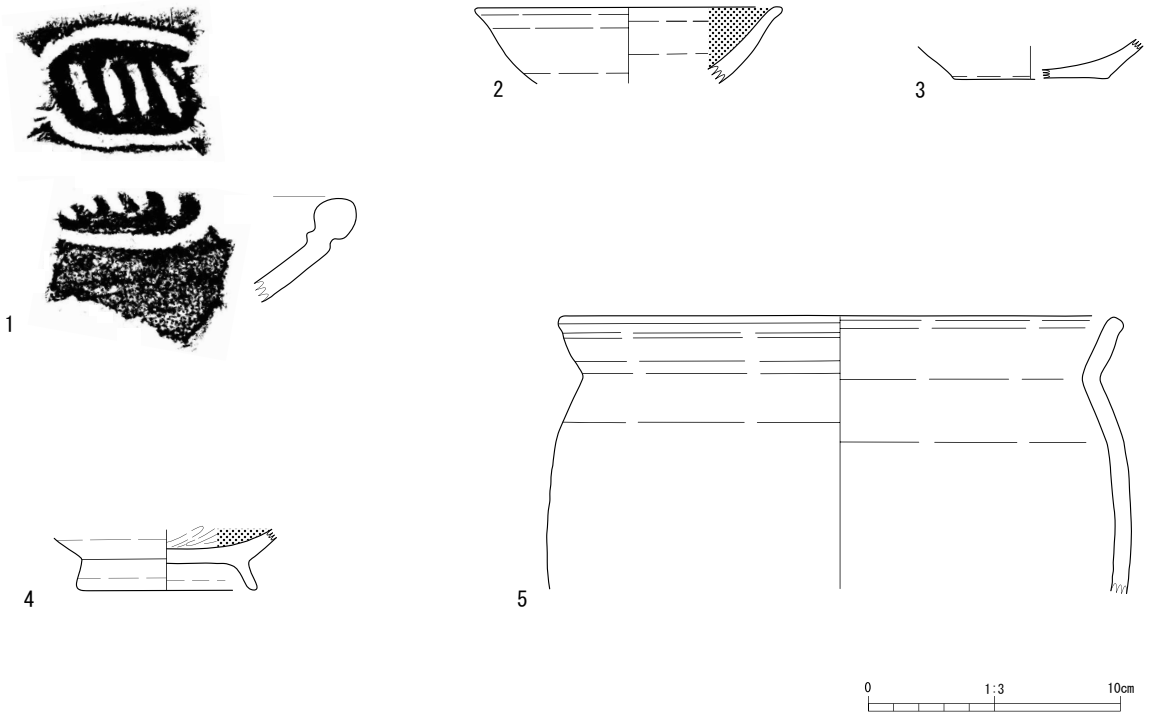
概要

今回の調査では農業基盤整備事業地に調査用トレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、周知の埋蔵文化財包蔵地「田多井北村遺跡」内で平安時代の遺構・遺物及び縄文土器が出土した（第８図）。この試掘調査結果をうけ、事業者である松本地方事務所農地整備課と協議を実施したところ、耕作地について盛土施工をし、埋蔵文化財は地下で現状保存を図ることとなった。実際の施工については、工事の進捗に併せて工事立会を実施し、変更設計どおり盛土施工されたことを確認している。

第６図　田多井北村遺跡遺構確認位置図（１／2,500）



第７図　試掘対象範囲（１／7,000）



第８図　田多井北村遺跡試掘出土土器

第２表　田多井北村遺跡試掘出土土器観察表

No.	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頚部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴 外面	技法の特徴 内面	技法の特徴 底部
1	AE トレンチ	縄文土器	浅鉢	口縁部	不明	－	不明	口縁部	不明	(4.2)	ナデ	ナデ	不明
2	AE トレンチ	黒色土器	坏	口縁部～体部下半	12.2	－	12.2	口縁部	不明	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ＋ミガキ	不明
3	AE トレンチ	土師器	坏	体部下半～底部	不明	－	不明	不明	6.2	(1.6)	ナデ	ナデ	糸切り
4	工事立会	黒色土器	坏	体部下半～底部	不明	－	不明	不明	7.0	(2.4)	ロクロナデ	ミガキ	糸切り＋ナデ
5	AE トレンチ	土師器	小型甕	口縁部～体部上半	22.4	20.5	23.2	体部	不明	(11.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明

調査地遠景（南東から）

調査地遠景（北東から）

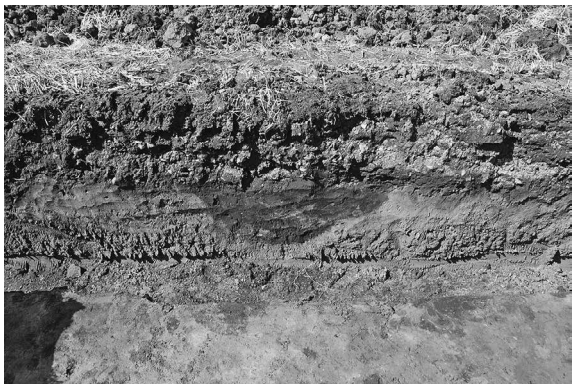
調査状況（北から）

AE トレンチ（北から）

拡張部遺構検出（西から）

拡張部遺構検出（南西から）

拡張部遺構検出（西から）



遺構断面検出状況

遺構平面検出状況

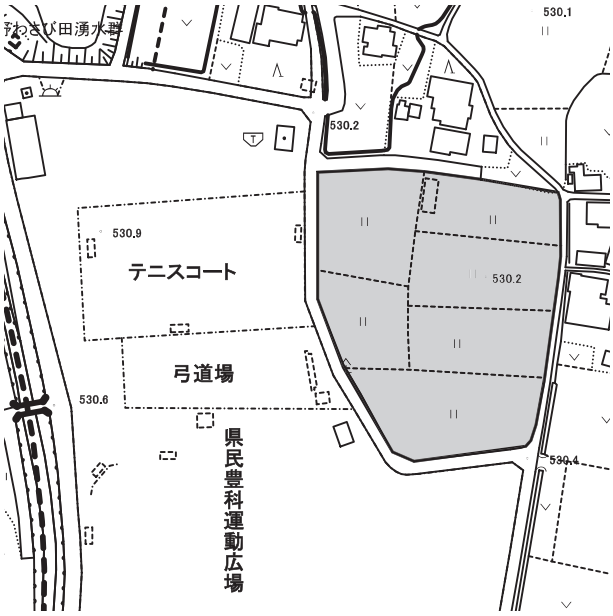
盛土施工確認

来光寺跡（第１表■40）

所 在 地	安曇野市豊科南穂高4985番１　外
調査期間	平成24年（2012）11月12日
調査面積	63㎡
調査契機	道路、公園造成

概要

今回の調査では運動公園及び道路の拡張予定地である農地に調査用トレンチ８箇所を設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、開発予定地の大部分で層厚約40㎝の耕作土直下が砂礫層となっており、粒度や礫の堆積状況から自然堆積であると判断された。このため、この調査で遺構・遺物は確認されていない。したがって、本件開発事業において埋蔵文化財に新規の影響を与える可能性は極めて低いと考えられる。



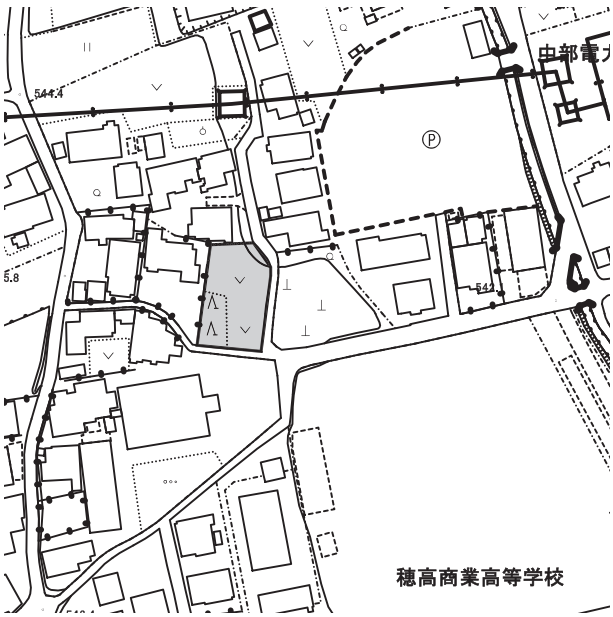
第９図　来光寺跡試掘位置図（１／2,500）

穂高高校北遺跡（第１表■41）

所 在 地	安曇野市穂高6867番２
調査期間	平成24年（2012）11月12日
調査面積	９㎡
調査契機	宅地造成

概要

今回の調査では宅地造成予定地に調査用トレンチ２箇所を設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、表土である層厚80㎝の耕作土直下から砂層と砂礫層の互層となっていることが確認され、粒度や礫の堆積状況から自然堆積であると判断された。このため、この調査で遺構・遺物は確認されていない。したがって、本件開発事業において埋蔵文化財に新規の影響を与える可能性は極めて低いと考えられる。



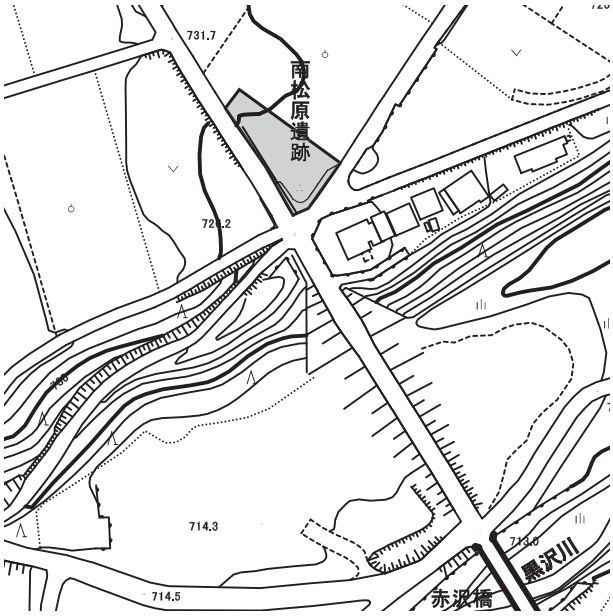
第10図　穂高高校北遺跡試掘位置図（１／2,500）

南（みなみ）松原（まつばら）遺跡（第１表■56）

所 在 地	安曇野市三郷小倉1917番
調査期間	平成24年（2012）12月18日
調査面積	23㎡
調査契機	ガス・水道・電気等

概要

今回の調査では上水道施設建設予定地に調査用トレンチ４箇所を設定し、遺構・遺物の検出を試みた。調査地は昭和45年12月に旧三郷村教育委員会が発掘調査を実施し、縄文時代の遺構等を調査した箇所である。今回の調査の結果、深度約１ｍで確認された基盤と考えられる砂礫層の直上はビニール等が混入する撹乱であった。このため、開発予定範囲においては昭和45年当時に調査した土層は残存していなかった。したがって、今回の上水道施設建設において埋蔵文化財に新規の影響を与える可能性はないと考えられる。



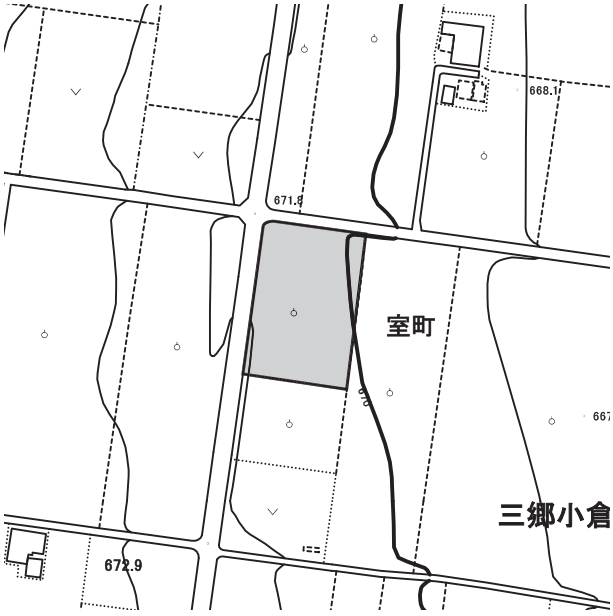
第11図　南松原遺跡試掘位置図（１／2,500）

チンクラ屋敷（やしき）遺跡付近（第１表■58）

所 在 地	安曇野市三郷小倉4496番１
調査期間	平成24年（2012）12月18日
調査面積	37㎡
調査契機	ガス・水道・電気等

概要

今回の調査では上水道施設建設予定地に調査用トレンチ９箇所を設定し、遺構・遺物の検出を試みた。調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しないが、付近にチンクラ屋敷遺跡があるため工事計画段階で試掘調査を実施したものである。調査では、基盤とした深度約１ｍの砂礫層まで掘削し、調査地内南東の深度30～40㎝で炭化物の包含を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。このため、調査地での工事において埋蔵文化財に新規の影響を与える可能性はないと考えられる。



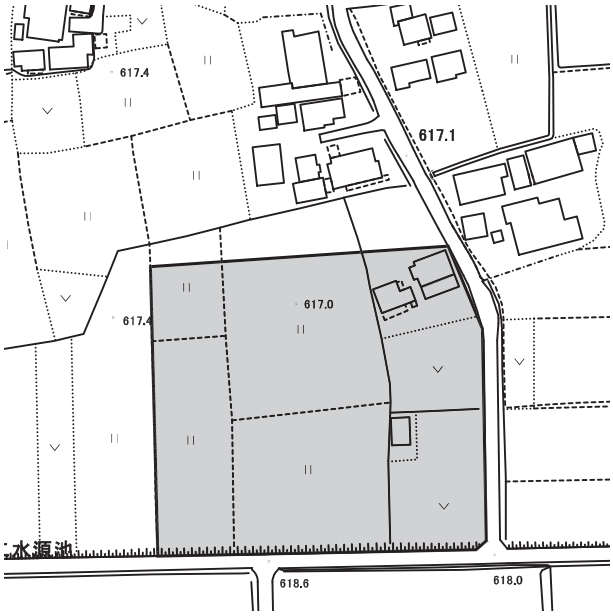
第12図　チンクラ屋敷遺跡付近試掘位置図（１／2,500）

遺跡外（第１表■64）

所 在 地	安曇野市三郷温51番１　外
調査期間	平成25年（2013）１月10日
調査面積	15㎡
調査契機	その他の建物

概要

三郷南部保育園建設に先立ち、計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当はしないが、埋蔵文化財存否の確認のため試掘調査を実施した。調査ではトレンチ３箇所を設定し、基盤と考えられる砂礫層まで最大で深度約70㎝の掘削を行った。この結果、いずれの個所でも遺構・遺物は確認されなかった。このため、今回の建設工事が埋蔵文化財に影響を与えることはないと判断される。



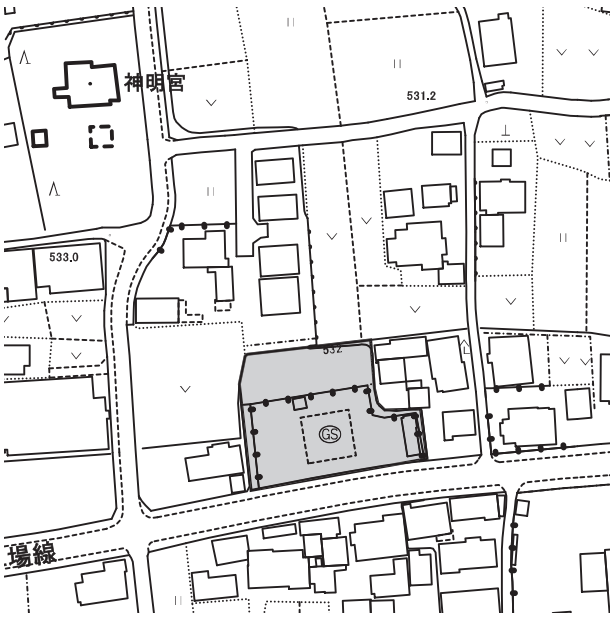
第13図　試掘位置図（１／2,500）

馬場街道遺跡（ばばかいどう）（第１表■67）

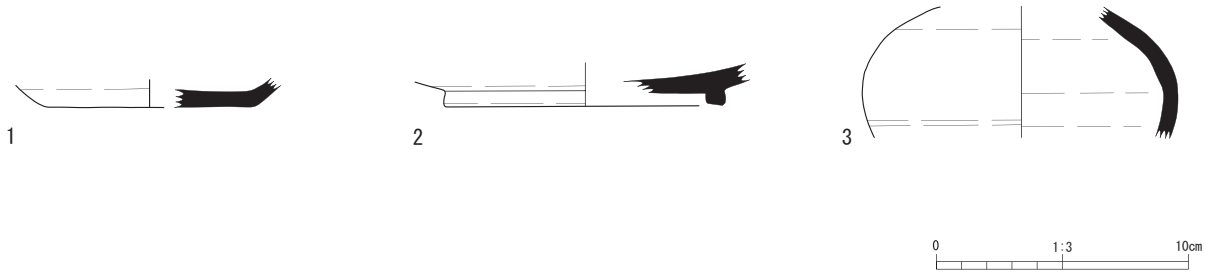
所 在 地	安曇野市穂高843番１　外
調査期間	平成25年（2013）２月８日
調査面積	64㎡
調査契機	店舗

概要

店舗建設に先立ち、計画地に調査用トレンチを設定して土層観察及び遺構・遺物の確認を実施した。調査地は以前ガソリンスタンド敷地であり、タンク設置箇所は大規模な掘削が行われていた。計画建物南側のトレンチで深度約60㎝のシルト層から須恵器破片が出土した。また、西側のトレンチでは深度80～90㎝までは後世の撹乱を受けている。今回の調査では遺構は確認されていないが、須恵器・土師器が遺構に伴わない形で出土したため、図示可能な遺物について掲載した（第15図）。



第14図　馬場街道遺跡試掘位置図（１／2,500）

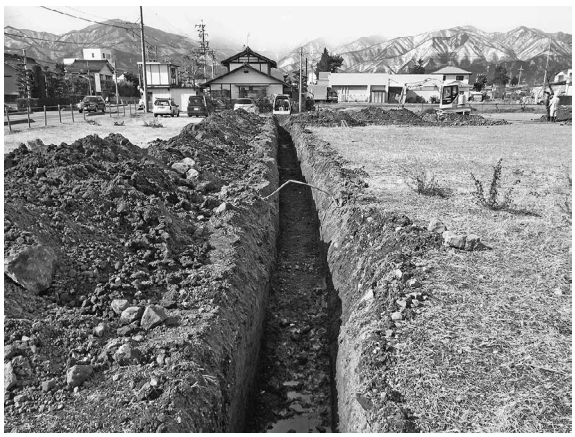


第15図　馬場街道遺跡試掘出土土器

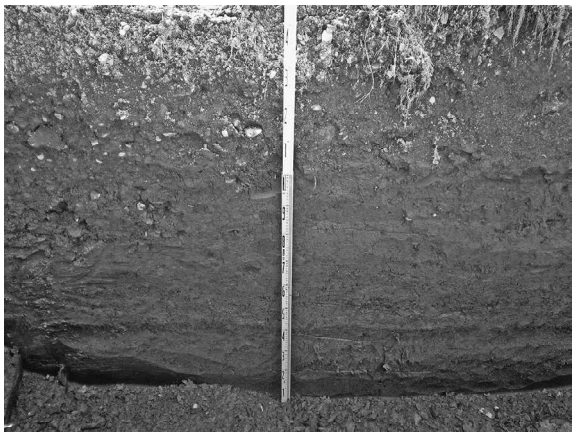
第３表　馬場街道遺跡試掘出土土器観察表

No.	出土位置	種別	器種	残存部位	口径（cm）	頚部径（cm）	最大径（cm）	最大径部位	底径（cm）	器高（cm）	技法の特徴 外面	技法の特徴 内面	技法の特徴 底部
1	Ｃトレンチ	須恵器	坏	底部	不明	－	不明	不明	8.4	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
2	Ｃトレンチ	須恵器	坏	底部	不明	－	不明	不明	11.2	(1.7)	不明	ロクロナデ	回転ヘラケズリ
3	Ａトレンチ	須恵器	壺	体部上半	不明	不明	12.5	体部	不明	(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明

調査地全景（東から）



Ａトレンチ（東から）



Ａトレンチ土層

Ｂトレンチ（北から）

第２章　栄町遺跡（第４次）発掘調査

１　調査の契機と経過

調査の概要

栄町（さかえちょう）遺跡（第４次）発掘調査

所 在 地	長野県安曇野市明科中川手（ながのけんあづみのしあかしなかがわて）6812番７
調査面積	120㎡
調査原因	その他の建物（公共施設）
発掘作業	平成24年（2012）９月１日（土）～平成24年（2012）10月５日（金）
整理作業	平成24年（2012）10月９日（火）～平成26年（2014）３月31日（月）

調査の契機と経過

この調査は安曇野市明科総合支所地域支援課による明科総合支所・明科公民館複合施設の付属倉庫建設にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は安曇野市長宮澤宗弘氏である。今回の調査地一帯は明治42年（1909）から現在まで、官営製材所、製糸工場、明科町役場等の施設用地として利用されてきた。この度、安曇野市明科総合支所・明科公民館複合施設の付属倉庫を建設する運びとなり、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地「栄町遺跡」であることから保護協議を開始した。

栄町遺跡では昭和53年（1978）、平成13年（2001）、平成23年（2011）に発掘調査を実施しており、いずれも古墳時代後期とされる集落跡が確認されている（明科町史編纂会1984、明科町教育委員会（以下、「教委」とする。）2002、安曇野市教委2013）。このため、今回の開発事業においても埋蔵文化財にある程度の影響を与える可能性を考慮して担当部署と保護協議を実施し、本件工事について平成24年（2012）５月10日付け「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条第１項）が提出され、５月14日付け安曇野市教育委員会教育長の意見書を付して長野県教育委員会教育長あて進達された。これに対し、５月21日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、この計画についての埋蔵文化財保護措置を記録作成のための発掘調査とする旨の通知があったため、これに基づき担当部署と埋蔵文化財の残存状況について確認するための試掘調査を実施することを合意した。

試掘調査は平成24年７月20日（金）に実施した。工事予定地に土層観察用トレンチを設定し、掘削したところ地表下約110㎝で遺構・遺物が残存していることを確認できた。この結果をふまえ、７月24日（火）に再度工事担当部署と協議を実施し、今回の建設工事によって埋蔵文化財への影響は不可避であること、工事によって影響を受ける埋蔵文化財の残存範囲が敷地内ほぼ全域にわたることが確認されたため、安曇野市教育委員会では発掘調査体制を整え、９月から発掘調査を実施することとした。

現場での発掘作業は平成24年（2012）９月１日（土）から10月５日（金）まで行い、整理作業は10月９日（火）から平成26年（2014）３月まで断続的に実施して、本書を発行し全事業を終了した。

調査体制

調査主体　安曇野市教育委員会

調査担当者　那須野　雅好（文化課文化財保護係長、～平成24年９月）、山下　泰永（文化課文化財保護係長、平成24年10月～）、土屋　和章（文化課文化財保護係）

調査員　百瀬　新治、今村　克

作業参加者　小穴　金三郎、勝野　辰雄、北林　節子、桜井　千夏、等々力　哲男、中嶋　鐵彌、松田　洋輔、横山　嵩

事務局　安曇野市教育委員会事務局　文化課

三澤　良彦（文化課長）

那須野　雅好（文化財保護係長、～平成24年９月）、山下　泰永（文化財保護係長、平成24年10月～）、逸見　大悟、土屋　和章（文化財保護係）

発掘作業・整理作業の経過

栄町遺跡（第４次）発掘調査における現場作業は、平成24年（2012）９月１日（土）から10月５日（金）にかけて実施し、調査面積は120㎡である。調査経過の詳細は調査日誌抄として後述する。現場作業に続いて、遺物整理を平成24年（2012）10月９日（火）から開始し、平成26年（2014）３月まで断続的に実施した。

調査日誌抄

平成24年（2012）

９月１日（土）　機材、仮囲搬入開始。

９月３日（月）　表土除去開始、仮囲設置。

９月４日（火）　表土除去。遺構の平面形確認。

９月５日（水）　遺構検出、遺構検出図面作成。午後からSB1精査開始。

９月６日（木）　雨天、ピット調査。

９月７日（金）　SB1、ピット精査。

９月10日（月）　SB1、ピット精査。

９月11日（火）　SB1、ピット精査。雨天のため正午で作業中止。

９月12日（水）　SB1、ピット精査。

９月13日（木）　SB1、ピット精査。SB2検出。

９月14日（金）　SB1、SB2、ピット精査。

９月18日（火）　SB1、SB2、ピット精査。

９月19日（水）　SB1、SB2、ピット精査。

９月20日（木）　SB1、SB2精査。土層観察用深掘り。

９月21日（金）　SB1、SB2精査。

９月24日（月）　SB1、SB2精査。

９月25日（火）　SB1実測、SB2精査。

９月26日（水）　SB2精査、午後から徐々に現場撤収。

９月27日（木）～10月５日（金）　測量。埋め戻し。重機・仮囲等撤収。

２　遺跡の位置と環境

地理的環境

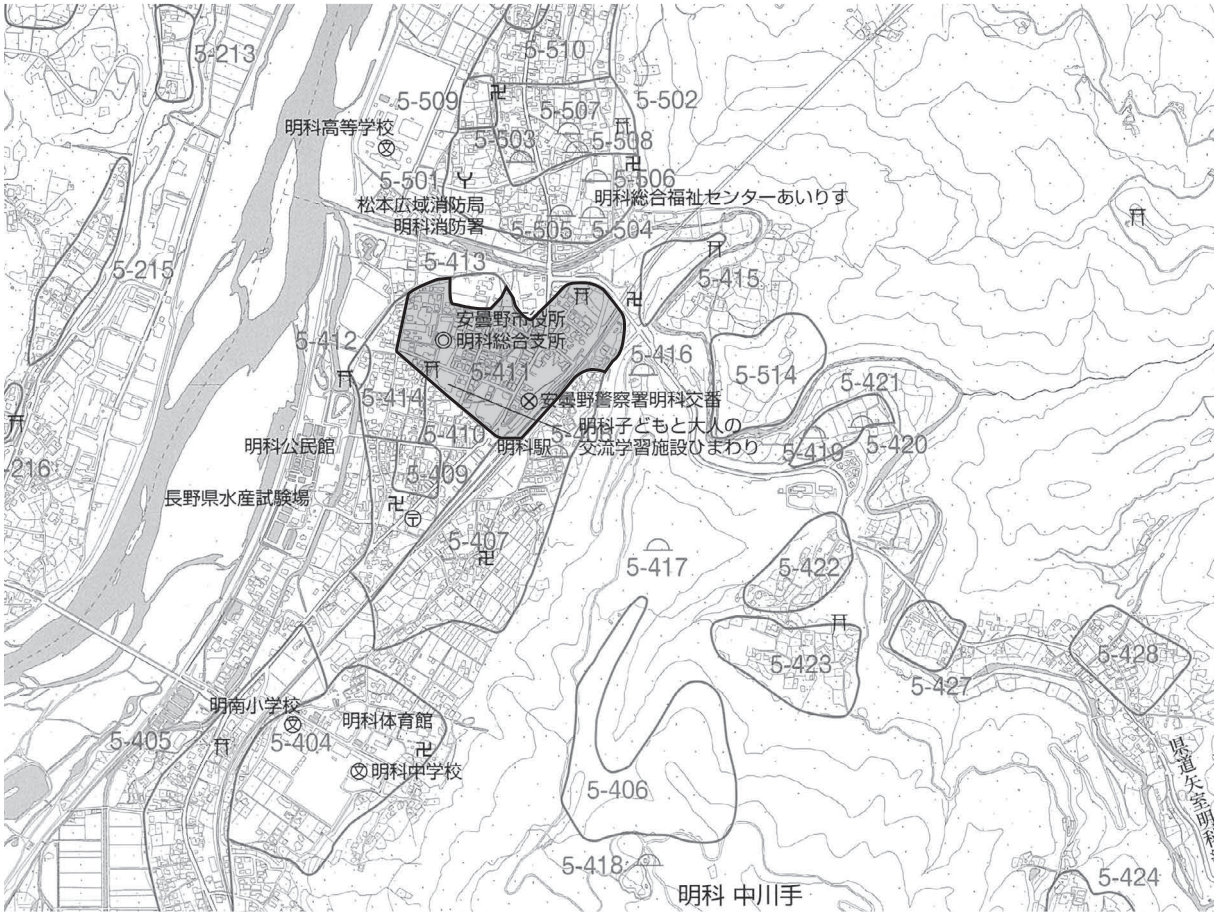
栄町遺跡は長野県安曇野市明科中川手の明科地区に所在する。安曇野市明科地域は、犀川・穂高川・高瀬川の三川が合流する地点を有する松本盆地東縁辺の最低地であり、東方には山地が広がる。明科地域の標高は海抜500～900mとなっており、大部分を占める低地性の山地と、犀川及び支流谷底部の低地から構成される。栄町遺跡の所在する明科地籍は北を会田川、西を犀川に画される南北約１㎞・東西約0.5㎞の河岸段丘上に展開しており、一帯は栄町遺跡のほか古殿屋敷、龍門淵遺跡、県町遺跡、明科廃寺、上手上郷遺跡等が密集して明科遺跡群を形成している。今回の発掘調査区はこの段丘面上に所在し、会田川に落ち込む段丘崖からやや離れた標高約520mの地点である。

歴史的環境

栄町遺跡の所在する安曇野市明科地域は松本盆地東縁部の北側とその東方に広がる山地からなっている。犀川によって形成された河岸段丘上では豊科田沢地区から明科南陸郷地区まで遺跡が断続的に確認されており、山間部には古墳や中世の山城などが築かれている。

現在までに安曇野市内で旧石器時代の遺跡が発掘された例はないが、明科中川手の吐中遺跡で昭和31年（1956）にオオツノシカの化石が不時発見された記録がある（明科町史編纂会1984）。確実に人々の生活を確認できるのは縄文時代以降で、明科地域ではこや城遺跡や上手屋敷遺跡などで縄文早期の押型文土器片、ほうろく屋敷遺跡で絡条体圧痕文土器が出土している。ほうろく屋敷遺跡は明科南陸郷に所在し集落が前・中期から後期まで継続し、明科町教育委員会による第１～４次の発掘調査によって石器製作址の可能性があると指摘されている（明科町教委2001）。また、明科光の北村遺跡では、長野自動車道建設に先立つ発掘調査で中期後葉から後期にかかる時期の土壙墓から多量の人骨が確認された（長野県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」とする。）1993）。晩期になると明科七貴の荒井遺跡から浮線文が施された氷Ⅰ式段階の鉢形土器が採集されている（明科町史編纂会1984）。

弥生時代になると、ほうろく屋敷遺跡では再葬墓４群16基とそれに伴う土器30個体あまりが出土している（明科町教委1991）。また、犀川左岸段丘上のみどりケ丘遺跡では宅地造成に伴い発掘調査が実施されて弥生中期の土器・石器が多量に出土している（太田・河西1966）。このとき集石遺構とされる礫群の中から多量の土器・石器が確認されており、変形工字文や磨消縄文が施文される土器群に太型蛤刃石斧や石包丁が伴う。

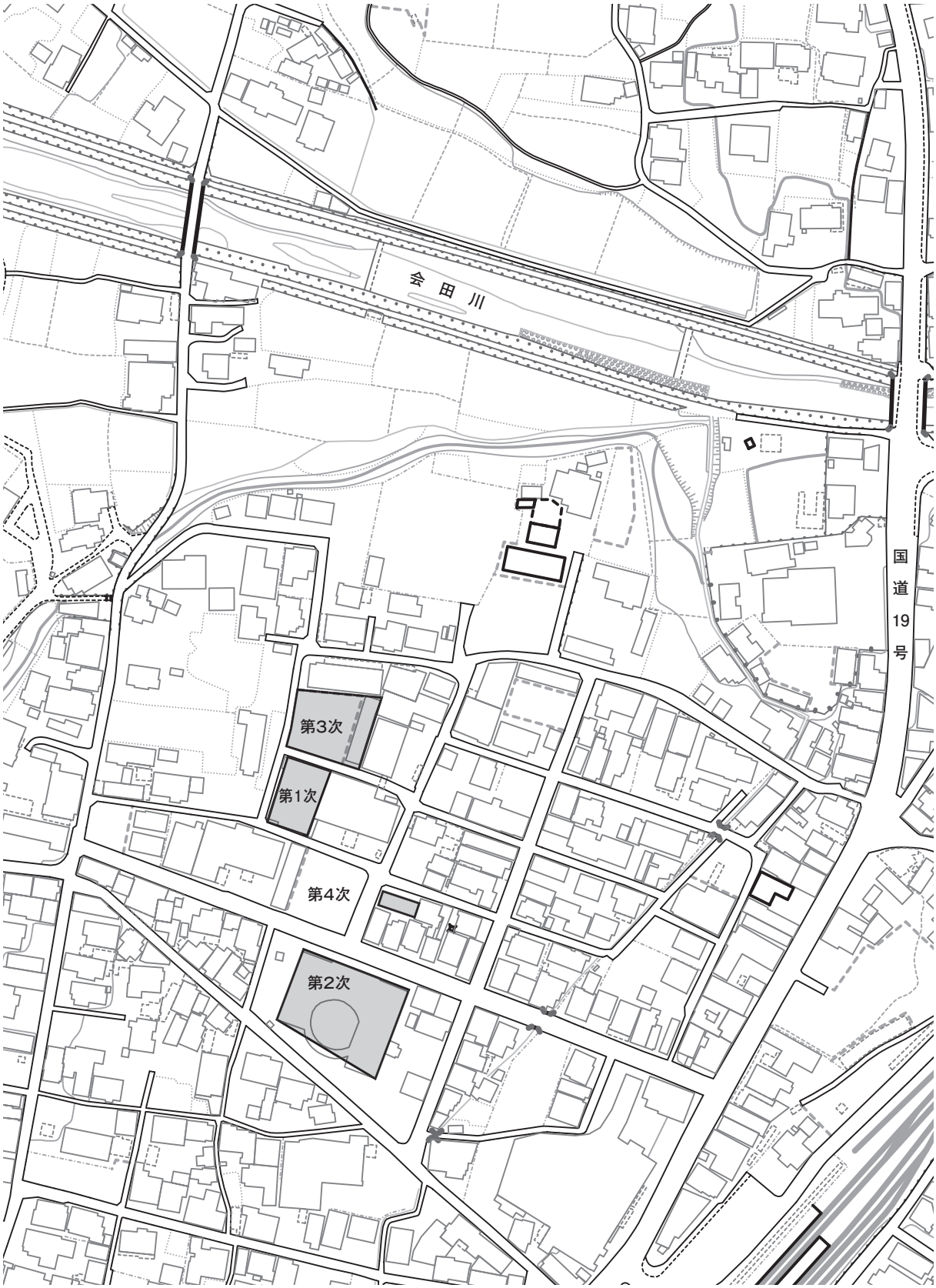


第16図　栄町遺跡付近の遺跡（１／17,500）

第４表　栄町遺跡付近の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	種別
5-213	孫五郎屋敷	縄文	散布地
5-215	上野遺跡	縄文・古代・中世・近世	散布地
5-216	やしき遺跡	縄文・古代・中世・近世	散布地
5-404	上手屋敷遺跡	縄文・古代・中世・近世	集落跡
5-405	町屋敷遺跡	中世・近世	集落跡
5-406	塔ノ原城址	中世・近世	城館跡
5-407	明科遺跡群上郷遺跡	縄文・古代	散布地
5-408	明科遺跡群上郷古墳	古墳	古墳
5-409	明科遺跡群明科廃寺	古代	社寺跡
5-410	明科遺跡群県町遺跡	古代	集落跡
5-411	明科遺跡群栄町遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
5-412	明科遺跡群龍門淵遺跡	弥生・古墳	その他（祭祀）
5-413	明科遺跡群古殿屋敷	古墳・平安・中世・近世	城館跡
5-414	明科遺跡群本町遺跡	弥生・古代	集落跡
5-415	こや城	縄文・古代・中世・近世	集落跡・城館跡
5-416	能念寺１号墳	古墳	古墳
5-417	能念寺２号墳	古墳	古墳
5-418	能念寺３号墳	古墳	古墳
5-419	武士平遺跡	古墳・中世・近世	散布地
5-420	武士平１号墳	古墳	古墳
5-421	武士平２号墳	古墳	古墳

番号	遺跡名	主な時代	種別
5-422	吐中遺跡	縄文	散布地
5-423	城下遺跡	縄文	散布地
5-424	海渡遺跡	中世	城館跡
5-425	光久寺	中世	社寺跡
5-426	清水古屋敷	中世	城館跡
5-427	平上ノ段館	中世	城館跡
5-428	中沢古屋敷	中世	城館跡
5-501	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	古代	集落跡
5-502	潮遺跡群新屋遺跡	古代	散布地
5-503	金山塚１号墳	古墳	古墳
5-504	金山塚２号墳	古墳	古墳
5-505	金山塚３号墳	古墳	古墳
5-506	金山塚４号墳	古墳	古墳
5-507	金山塚５号墳	古墳	古墳
5-508	お経塚古墳	古墳	古墳
5-509	潮遺跡群古屋敷遺跡	古代・中世・近世	城館跡
5-510	潮遺跡群浦田遺跡	古代・中世・近世	散布地
5-511	潮遺跡群古殿屋敷	中世・近世	城館跡
5-512	潮遺跡群塩田若宮遺跡	縄文・古代	集落跡
5-513	潮遺跡群三五山遺跡	縄文	散布地
5-514	潮遺跡群茶臼山遺跡	縄文・中世・近世	城館跡・散布地



第17図　発掘調査位置図（１／2,500）

明科地域では古墳時代後期の古墳が確認されている。特に潮（うしお）地籍に分布する複数の古墳は潮古墳群としてまとまりがあり、発掘調査によって７～８世紀初頭に比定されている（明科町教委2005）。この時代の集落の様相は不明確な部分が大きいが、潮地籍からは土師器甕が採集されており未発掘部分に古墳時代集落が存在する可能性がある。会田川より南の明科中川手（なかがわて）では、昭和53年（1978）の旧明科町役場議会棟建設時に実施した栄町遺跡の発掘調査で６世紀後半に比定される住居跡が発掘されている（明科町史編纂会1984）。この住居跡は一辺５ｍほどで直径15㎝程度の川原礫を一面に敷き詰めた特異な遺構である。これ以降、栄町遺跡では今回までに４次の発掘調査が実施され古墳時代後期を中心とした集落の様相が明らかになりつつある（明科町教委2002、安曇野市教委2013）。

奈良時代になると明科中川手で７世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、所在地から明科廃寺と呼ばれる。明科廃寺では平成11年（1999）に行われた発掘調査によって掘立柱建物跡３棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡１棟などに伴って多量の瓦が出土した（明科町教委2000）。昭和28年（1953）の発掘調査と併せて、古代瓦のほか鴟尾（しび）や瓦塔が確認され県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目される。明科廃寺の造営期間については未だ詳らかでないが、補修瓦の様相などから平安時代までは同地で存続していたものと考えられている。奈良・平安時代は明科地域全域で集落が確認される時期でもあり、開発が広範囲に及んでいったといえる。

明科地域には中世の城館跡が多く残されており、こや城遺跡、茶臼山（ちやうすやま）遺跡、上手屋敷（わでやしき）遺跡、塔ノ原（とうのはら）城址（じょうし）などで遺物の出土がある。このうち塔原氏（とうのはらし）居館跡とされる上手屋敷遺跡は平成元年（1989）と平成15年（2003）に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔相輪などが出土した（明科町史編纂会1984、明科町教委2004）。

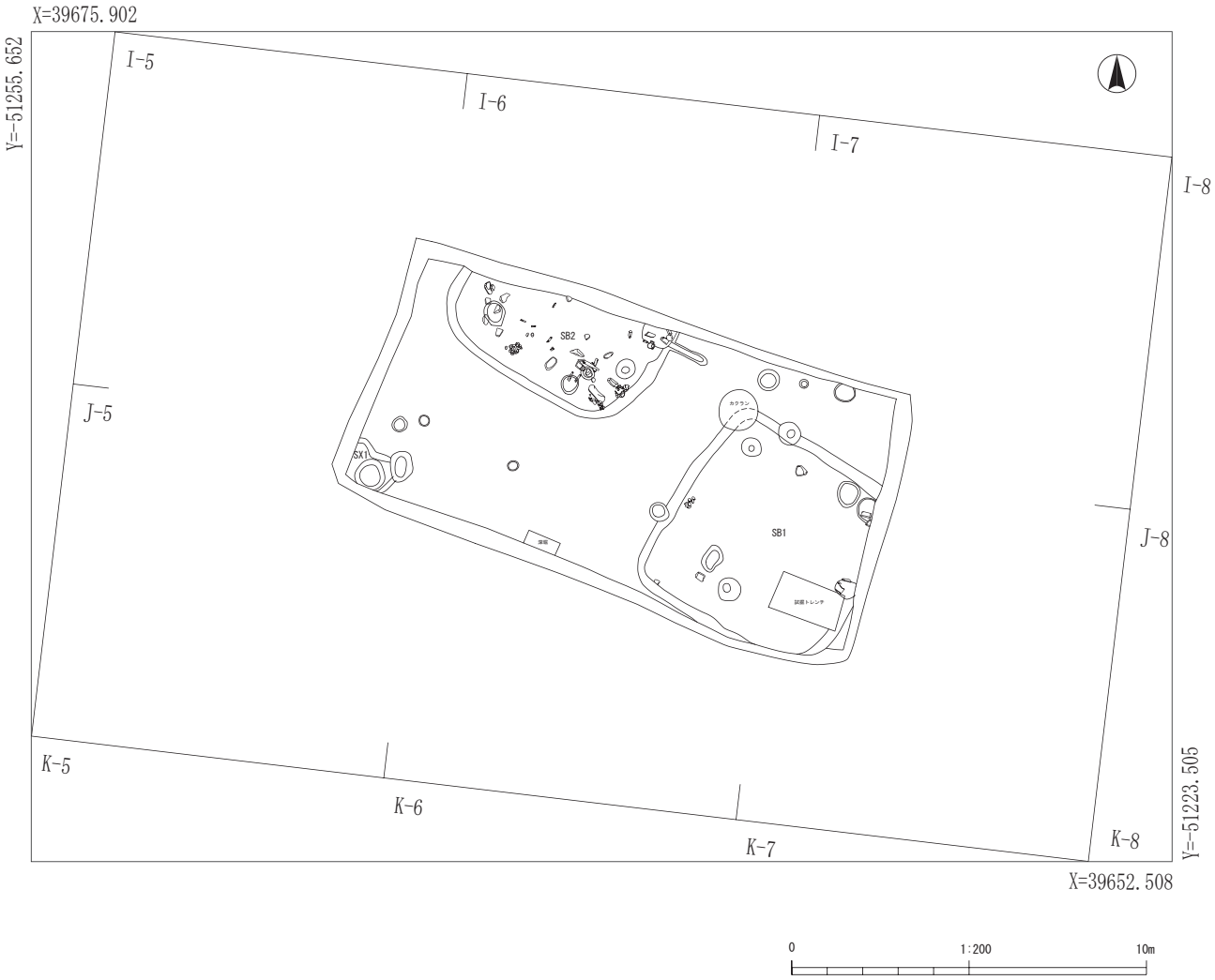
栄町遺跡の概要

栄町遺跡では今回までに４次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査結果から、この付近一帯には古墳時代後期を中心とする集落が展開したことが判明してきた。

第５表　栄町遺跡発掘調査記録

調査次	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文　　献
第１次	昭和53年	公共施設建設（明科町役場庁舎議会棟）	炉をもつ礫敷住居址、土師器	明科町史編纂会1984
第２次	平成13年	公共施設建設（「子どもと大人の交流学習施設」）	竪穴建物跡４、掘立柱建物跡１、ピット、土師器	明科町教委2002
第３次	平成23年	公共施設建設（明科総合支所・公民館複合施設）	竪穴建物跡12、掘立柱建物跡６、溝跡１、ピット等、土師器、須恵器、管玉	安曇野市教委2013
第４次	平成24年	公共施設建設（倉庫）	竪穴建物跡２、ピット、土師器、須恵器	安曇野市教委2014（本書）

第18図　栄町遺跡グリッド配置図



第19図　発掘調査区全体図

3　調査の方法と成果

発掘調査・整理作業

公共施設建設地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、過去の発掘調査結果から遺構が良好に残存している可能性が極めて高いため、記録保存のための発掘調査を念頭に保護協議を継続した。この結果、工事計画地に遺構が残存していること、これに加えて工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることが確認された。このため、安曇野市明科総合支所地域支援課と保護協議を実施し、確認された遺構の範囲について発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかる方向となった。

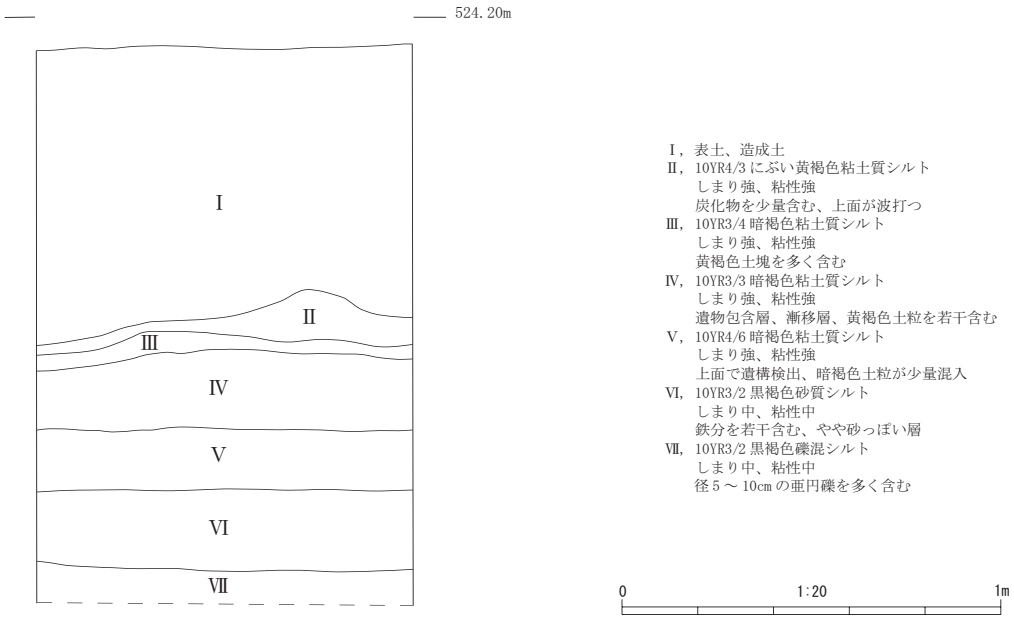
本調査は平成24年（2012）９月１日から10月５日にかけて実施した。調査区には平成23年度に実施した栄町遺跡（第３次）発掘調査で使用した一辺10mのグリッドを拡張して設定し、遺構・遺物の所在についてはこのグリッドを基本として記載した。表土除去については、重機を用いて遺構面直上までの造成土・堆積土を除去し、遺構検出を人力で行った。遺構精査は、竪穴建物跡について４分割、それ以外の遺構については基本的に２分割して掘り下げを行っている。遺物の取り上げは遺構ごと行ったが、必要に応じて出土位置を三次元記録した遺物もある。基準点測量等・遺構観測は業者委託とし、調査員・

作業員が現場で簡易遣方測量した図面とあわせて最終的な遺構図を作成してある。記録写真は現場・整理ともに主としてデジタルカメラとフィルムカメラを併用した。

整理作業は現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。

４　基本土層

本調査の基本土層は調査区南壁で観察した。各土層の詳細は第20図のとおりである。調査地は明治期以降、工場用地等として利用されてきた経緯を持つため表土から70㎝程度のⅠ層とした土層はこの期間の人為的な堆積土であった。この下に無遺物層であるⅡ層、Ⅲ層が存在する。Ⅳ層には若干の遺物が包含されているが遺構は検出できなかった。Ⅴ層では上面で古墳時代後期の遺構が検出できたため、この面を検出面として設定し精査を実施した。さらに下層に遺構が存在するか否かを確認するため深掘りを行ったが、やや砂っぽいⅥ層と径５～10㎝の亜円礫主体の礫混シルト層であるⅦ層を確認した。これらはいずれも無遺物層であり、掘り込み等の遺構も確認されていない。なお、このⅦ層は栄町遺跡第３次発掘調査で確認されたⅨ層に比定される。また、Ⅶ層以深については、工事で影響を受けない深度であるため確認調査はしていない。



第20図　基本土層

５　遺構

栄町遺跡（第４次）発掘調査では、竪穴建物跡２棟、ピット等の遺構を検出し精査した。これらのうち竪穴建物跡からは比較的まとまった量の土器類が出土している。今回の調査区のみで遺構の分布を検討することはできないが、過去の発掘調査成果と併せて検討すると第３次発掘調査区から連続して建物跡が展開しており南限は第２次調査区付近になると考えられる。集落跡の東西の境界については未だ不確定である。

SB1

位置　I6、I7、K6、K7グリッド

平面形・規模　東西6.0m×南北5.9mでほぼ正方形を呈する。

壁・堆積土　残存している壁高は約0.4mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土はカマドまで含め８層を確認した。なお、SB1は試掘時に確認された遺構であり、試掘トレンチがカマド前面付近に位置する。

床面　貼り床は確認されず、床面直上では特にカマド周辺に遺物が多く確認されている。

カマド　東壁中央付近に構築され、燃焼部は調査区内であったが煙道は調査区外に伸びている。袖石は左袖に残存しており、燃焼部中央には支脚石も残存していた。カマド付近からは土器類が多く出土しており、本遺構廃絶時の時期比定の検討材料である。

重複関係　壁をP5、P7に切られている。

出土遺物　SB1ではカマド付近から多くの土器が出土した。土師器甕は球胴の器形と長胴の器形が共伴している。また、覆土からは土製紡錘車２点が出土している。床面から砥石は確認されていないが、西壁付近で集石が出土している。

SB2

位置　I6グリッド

平面形・規模　東西6.2m×南北（3.1）mでほぼ正方形を呈すると推定される。

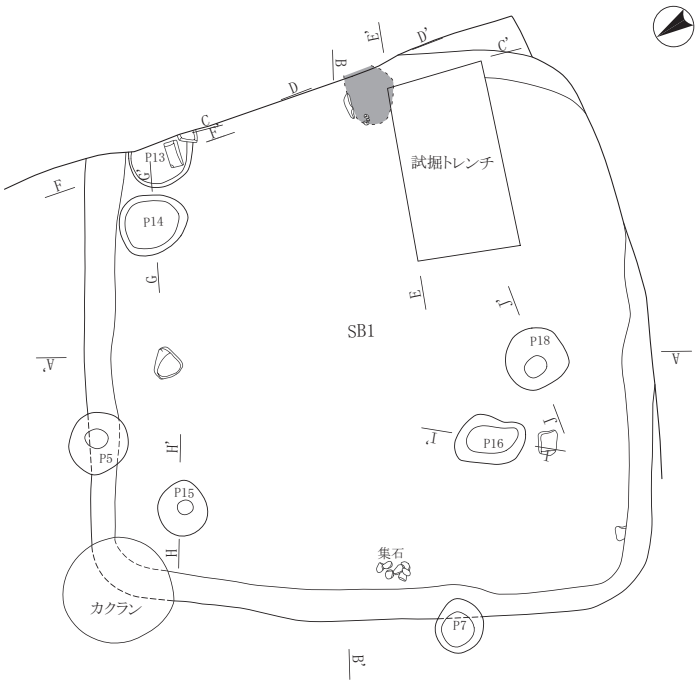
壁・堆積土　残存している壁高は約0.6mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土はカマドまで含め８層を確認した。

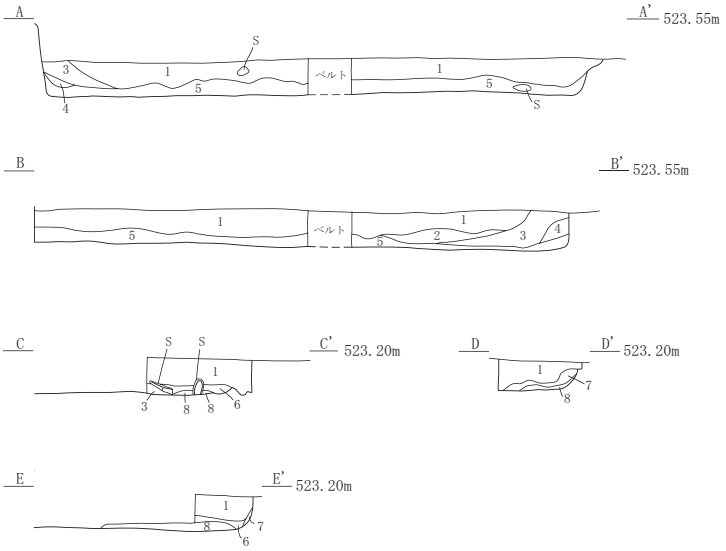
床面　貼り床は確認されず、床面直上の６層はやや砂っぽいシルトであった。また床面からは砥石や炭化物塊が確認されている。

カマド　東壁中央付近に構築され、左袖は調査区外となっている。煙道は約1.1mで調査区外に伸びている。砂岩の袖石が右袖に残存しており、燃焼部中央には完形の土器が残存していた。

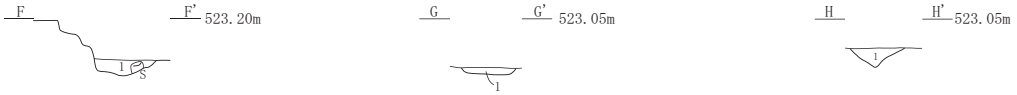
重複関係　調査区内では他の遺構との重複関係はない。

出土遺物　SB2ではカマド付近から多くの土器が出土した。床面からは砥石が確認され、南壁付近で集石が出土している。





1, 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒、炭化物を多く含む。
下面に炭化物多い。
2, 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
黄褐色粘土塊を多く含む。
3, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
鉄分を若干含む。
4, 10YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色粘土塊を多く含む。
5, 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
粘土塊を含まない、鉄分を多く含む。床下の堆積土か。
6, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
焼土粒を多く含む。
7, 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
8層の焼土粒を多量に含む。
8, 5YR3/3暗赤褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
焼土層、炭化物若干含む。



1, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を若干含む。

1, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を若干含む。

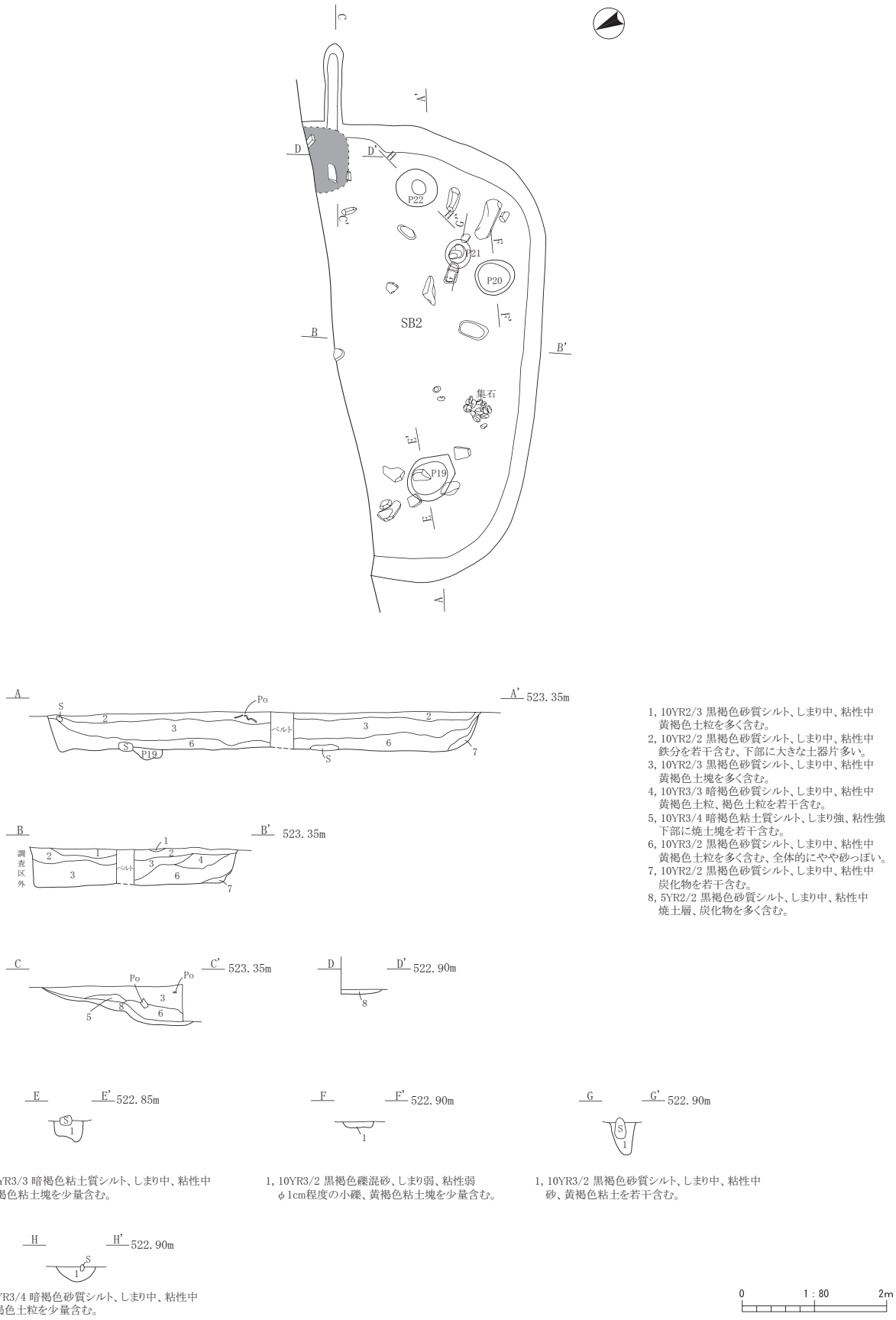
1, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を若干含む。

1, 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
φ3～5cmの亜円礫を多く含む。

1, 10YR2/3黒褐色 砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を若干含む。

0　1：80　2m

第21図　SB1遺構図


SB2
P19
P20
P21
P22
集石
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
Po
S
ベルト
調査区外
523.35m
522.90m
522.85m
1, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を多く含む。
2, 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
鉄分を若干含む、下部に大きな土器片多い。
3, 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土塊を多く含む。
4, 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒、褐色土粒を若干含む。
5, 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
下部に焼土塊を若干含む。
6, 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を多く含む、全体的にやや砂っぽい。
7, 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
炭化物を若干含む。
8, 5YR2/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
焼土層、炭化物を多く含む。
1, 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色粘土塊を少量含む。
1, 10YR3/2 黒褐色礫混砂、しまり弱、粘性弱
φ1cm程度の小礫、黄褐色粘土塊を少量含む。
1, 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
砂、黄褐色粘土を若干含む。
1, 10YR3/4 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を少量含む。
0
1：80
2m

第22図　SB2遺構図

第６表　竪穴建物跡観察表

名　称	位　置（グリッド）	規　模（m）			平面形	主軸方向	炉・カマド
		主軸	直行軸	壁高			
SB1	I6、I7、K6、K7	6.0	5.9	0.4	方形	N60° W	東壁中央にカマド
SB2	I6	6.2	(3.1)	0.6	(方形)	N59° W	東壁中央にカマド

（　　）は残存している部分の規模。

SX1

位置　J5グリッド

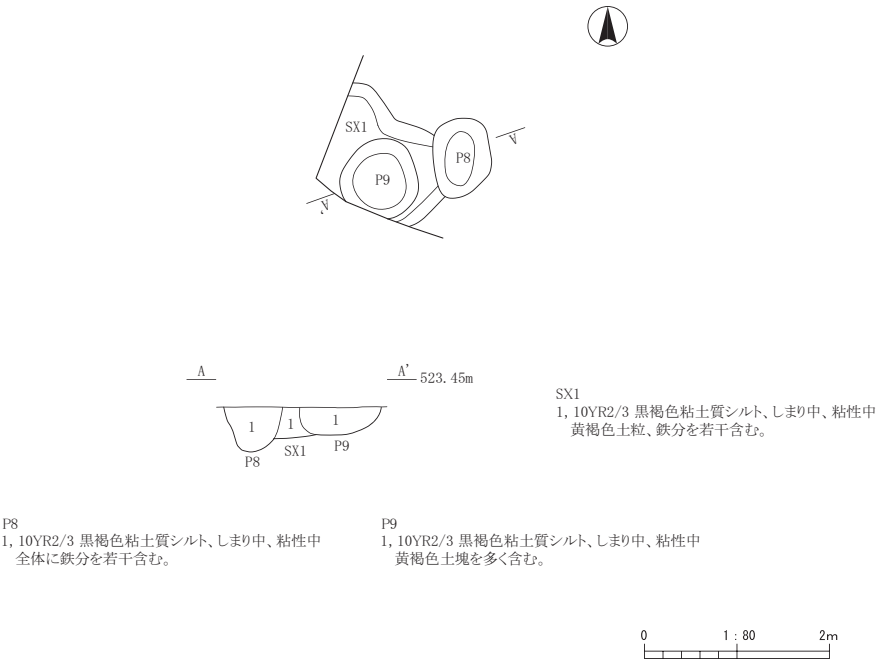
平面形・規模　SX1は調査区内に残存している部分は少なく不整形である。また、P8、P9に切られている。近代以降の撹乱を受けており、調査区外まで確認できれば竪穴建物となる可能性もある。

壁・堆積土　壁はピットとの切り合いのない個所で、なだらかに立ち上がることが確認された。また、堆積土は１層のみで黄褐色土粒及び鉄分を若干含んでいる。

床面　貼り床のような土層は確認されていない。

重複関係　P8、P9に切られている。

出土遺物　図示できる遺物として砥石が出土した。



第23図　SX1遺構図

6　遺物

栄町遺跡（第４次）発掘調査出土遺物のうち土器類については、栄町遺跡（第３次）発掘調査報告で使用した基準（安曇野市教委2013）に基づき記載を行う。なお、本基準作成に際して、須恵器については屋代（やしろ）遺跡群（長野県埋文センター2000）の基準、土師器については県内で該期の良好な資料が得られている榎田（えのきだ）遺跡（長野県埋文センター1999）の基準を参考とした。なお、今回の調査では竪穴建物跡の切り合い関係はなく遺構間の直接的な前後関係は得られていない。

須恵器分類

坏蓋　須恵器坏形土器の蓋として使用されたと考えられる器形・法量の蓋形土器。

坏蓋Ａ：内面にかえりを持つ蓋。

坏蓋Ｂ：内面にかえりを持たず、口縁端部を折り曲げる蓋。

坏蓋Ｈ：椀形の坏を伏せた形態に近い坏。

坏形土器　土師器と同様に器高が口径の２分の１を下まわることを目安として鉢類と区別する。

坏Ａ：直線的に開く体部をもつ無台の坏。体部内面の見込部に指押さえの跡が残る。底部調整にはヘラ切り、ヘラ削りが見られる。

坏Ｂ：断面箱型の体部に高台を付した形態。定型的な法量に分化する。

坏Ｇ：ヘラによる底部調整をもつ直径11.5㎝以下の無台の坏。形態は坏Ａに似る。

坏Ｈ：丸底で口縁部下に蓋受け部分を持ち、ここから口縁部にかけて立ち上がる形態の坏。口縁部の立ち上がりは個体差がある。古墳時代に特徴的とされる。

甕形土器　貯蔵具として使用されたと考えられる、甕形の土器。

甕Ａ：体部外面にタタキ調整がなされ、卵形の体部に長く外反する口頸部を持つ甕。

瓶形土器　平瓶や横瓶などの口頸部のみが確認されたものを一括した。

土師器分類

坏形土器　口径12～16㎝程度で、器高が口径の２分の１を下まわることを目安として鉢類と区別する。

Ａ類：半球形の坏で、口縁部が内斜もしくは外反する。内外面ともミガキを施す個体が多い。しかし一部にハケ後ミガキを施す個体もある。口縁部の形態から４種に細分する。

A1：口縁部が内斜して肉厚になり、内側に面を有する。口縁端部はほとんど外反しない。

A2：口縁部は内斜して口縁端部を外につまみ出す。

A3：口縁端部を単純に外反させる。

A4：口縁部は強く外反し、口縁端部に面を持ち、端部上端を若干つまみ出す。精製品であり、内外面ともケズリ後ミガキを丁寧に行う。

Ｂ類：半球形の坏で口縁部は上方にのびるか、若干内湾する。内外面ともミガキを施す個体が多い。榎田遺跡報告書ではこの類型に時期差を設け、古墳時代中期の資料をＢ類、後期後葉の資料を

B′類としているが、今回の調査では本類型自体から時期差を観察することができなかったため本類型の説明に該当する坏類は統一してＢ類とした。

Ｃ類：半球形の坏で、口縁部が強く外反する形態から次第に変化し、派生形態も登場する。榎田遺跡報告書ではC1a～d、C2、C3に細分される。

Ｄ類：須恵器の模倣形態。胴部と底部の外面境に稜を有する。口縁部は上方に向く。器高の高い形態をD1（器高×２≧口径）、器高の低い形態をD2（器高×２＜口径）とする。

鉢形土器　口径が坏形土器の平均値を上回る（約16cm以上）、もしくは器高が口径の２分の１以上となることを目安とする。整形技法は坏形土器と同様に内外面ミガキを基本とする。外面整形にケズリ後ミガキの例もある。黒色土器も多い。器形に安定感がなく、中間形態が非常に多いことが特徴とされる。

Ａ類：口縁部を若干外反させる意識がある。胴部上半は外方に開くか、内湾する。

Ｂ類：口縁部が直線的に延びるものの、外反する形態もある。胴部上半は外方に開く。坏と類似した形態であるが、坏との法量差が大きい点で鉢として抽出する。

上記Ａ、Ｂ類の法量は、１：口径20～29cm程度、器高11～17cm程度、２：口径15～19cm程度、器高８～13cm程度、３：口径12～15cm程度、器高10cm前後に区分する。

高坏形土器　坏類に脚台を有する器種である。今回の発掘調査では器形全体がわかるような残存率の高い個体は出土していない。

Ｉ類：須恵器の模倣形態。坏部の胴下部は湾曲し外面に明確な稜が見られる。坏部のみ出土したものを本類型とした。

Ｌ類：坏部と脚部の接合部が中実で、円錐形の長脚を有する例を広くまとめる。坏部の形態から３種に細分する。

L1：坏部に坏Ｃ類を有する。

L2：坏部に坏Ｂ類を有する。

L3：坏部が直線的に延びる。

甕形土器　主な用途が食物の調理に用いたと推定される容器で、外面整形がハケ中心となる場合を甕とする。しかしナデ整形や、ミガキを行う場合もある。内面整形はハケ以外にも、工具によるナデ、ケズリ、ミガキなどがある。

Ａ類：胴部中央付近に最大径のある大～小型の球胴形態をまとめる。法量によって次のとおり細分する。

A1：器高29cm前後で胴最大径と口径の差が８cm以上。

A2：器高26cm前後で胴最大径と口径の差が４～９cm程度。

A3：器高が20cm前後で胴最大径と口径の差が４～６cm程度。

Ｂ類：小型で口径15cm前後、胴最大径と口径の差が２cm以内を目安とする。口径と器高の比率が１対１に近く、口縁が強く開いた印象を持つため、甕Ａ類とは区別した。

Ｃ類：大型で胴部中央付近に最大径があり、胴最大径と口径の差が５～８cmの範囲を目安とする。Ａ類より若干細い。２種に細分する。

C1：器高が29㎝前後で楕円形に近い形態。

C2：器高が約30㎝以上で、ラグビーボールに近い形態。

Ｄ類：長胴甕。口径15～20㎝の範囲で、胴最大径と口径の差が４㎝以内を目安とする。器高は13～39㎝と幅広いものの、大きさの基準が各期に存在しないため、大～小で紹介する。整形技法は外面ハケが主体であるが、ナデ整形やミガキ整形の例も存在する。

Ｆ類：長胴甕。胴最大径は胴部上半にあり、底径が小さく、烏帽子形の形態となる。外面の整形技法にケズリを用いるのが特徴とされる。

甑形土器　底部が存在しないか、あるいは底部に孔を持つもの。

Ｂ類：口径20～25㎝、器高20㎝以上を目安とする。この範囲で若干大小に分かれるが、規格性は見られない。胴部は直線的で、バケツ形の形態となる。通常は牛角状の把手を持つが、例外もある。底部は存在しない。内外面にミガキを施す個体が多い。側面底部付近に一対の孔を有する例も見られる。

Ｃ類：中～小型の甑。器高９～18㎝程の範囲を目安とするもこの中で幾つかの大きさに分かれるものの、規格性は見られない。またＢ類との中間形態も存在する。通常は把手を持たない。底部の形態から３種に細分する。

C1：底部を持たない。

C2：底部を持ち単孔。

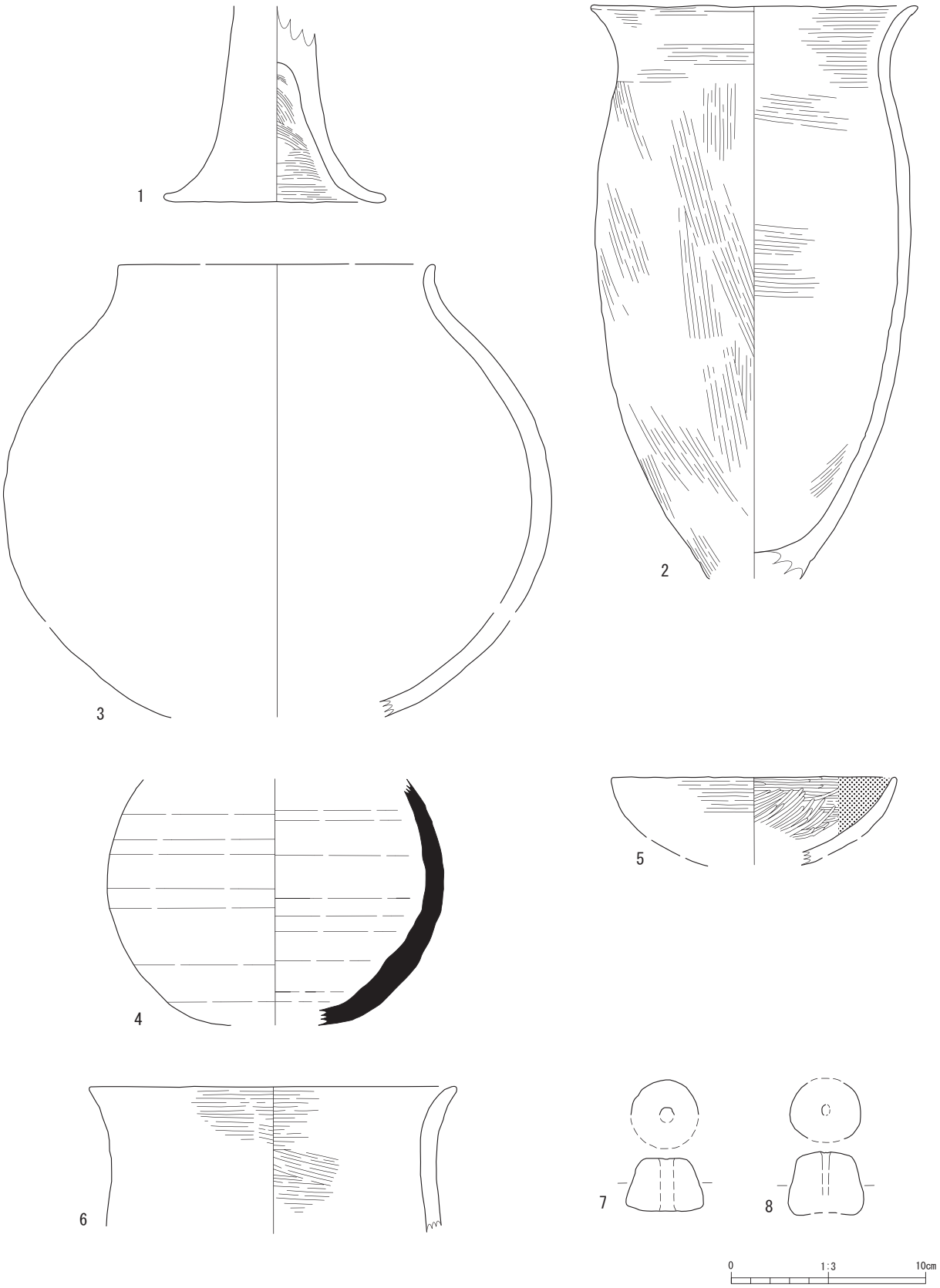
C3：底部を持ち多孔。

壺形土器　主な用途が貯蔵あるいは祭祀に用いられたと推測される容器で、外面整形がミガキ中心となる場合を壺とする。

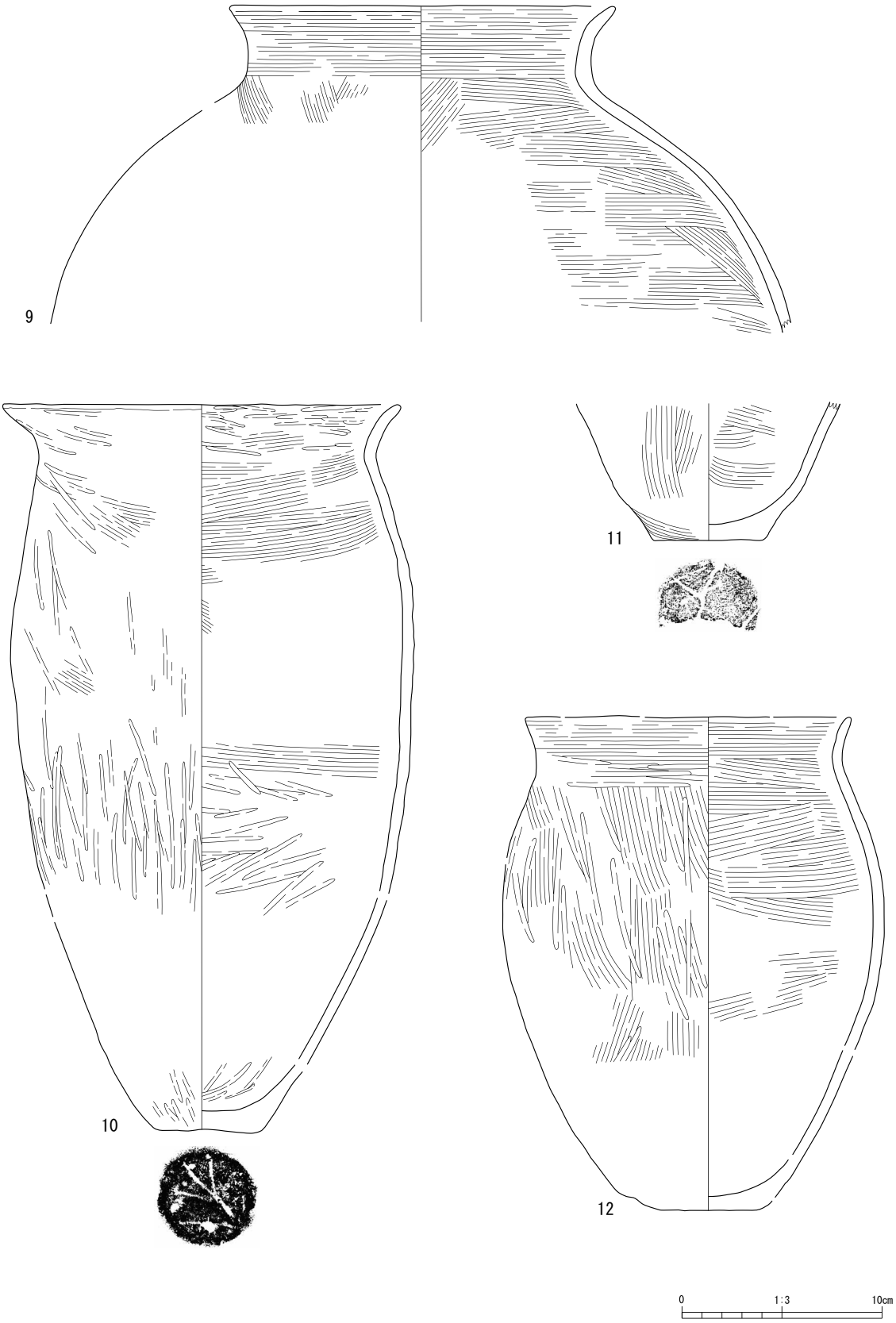
ミニチュア土器　手づくねで成形され、通常の法量より著しく小さい土器類をミニチュア土器とする。

土製品

今回の発掘調査では、土器類の他に土製品として紡錘車が出土した。栄町遺跡（第３次）発掘調査でも当該期の土製紡錘車が出土している。



第24図　SB1出土土器・土製品



第25図　SB2出土土器（その１）

第26図　SB2出土土器（その２）

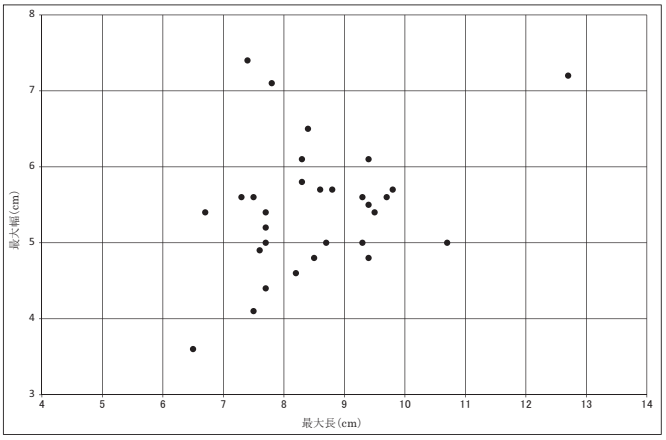
第27図　SB2出土土器（その３）

石製品

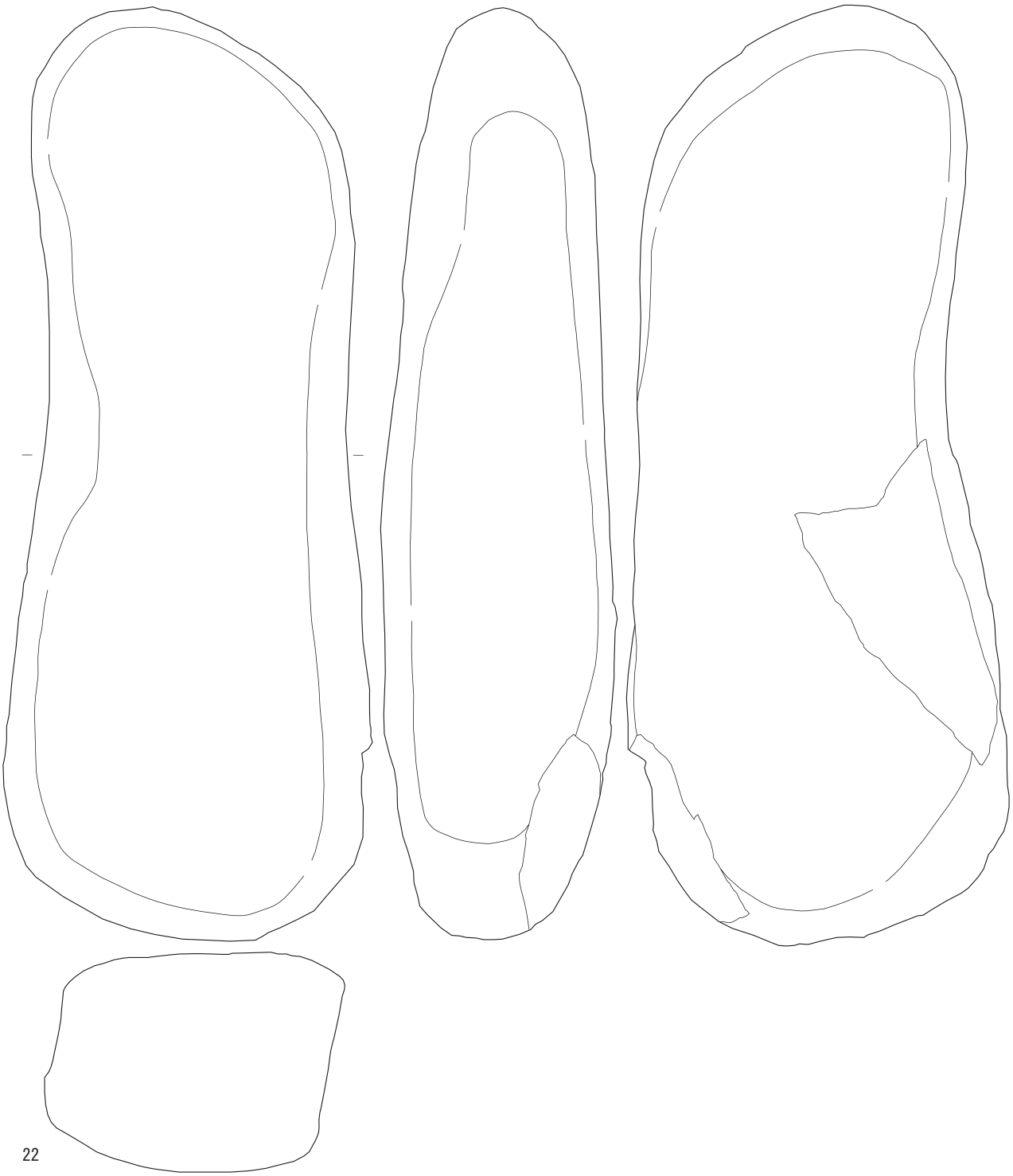
石製品としては、砥石が出土している。砥石のうち22～24はSB2出土で、このうち22及び23はその出土状況及び重量から置き砥として使用されたと考えられる。いずれも滑らかになった使用面を上にして竪穴建物内の床面に置かれた状態で出土した。このため原位置を保ったまま埋没していったと推測される。

集石

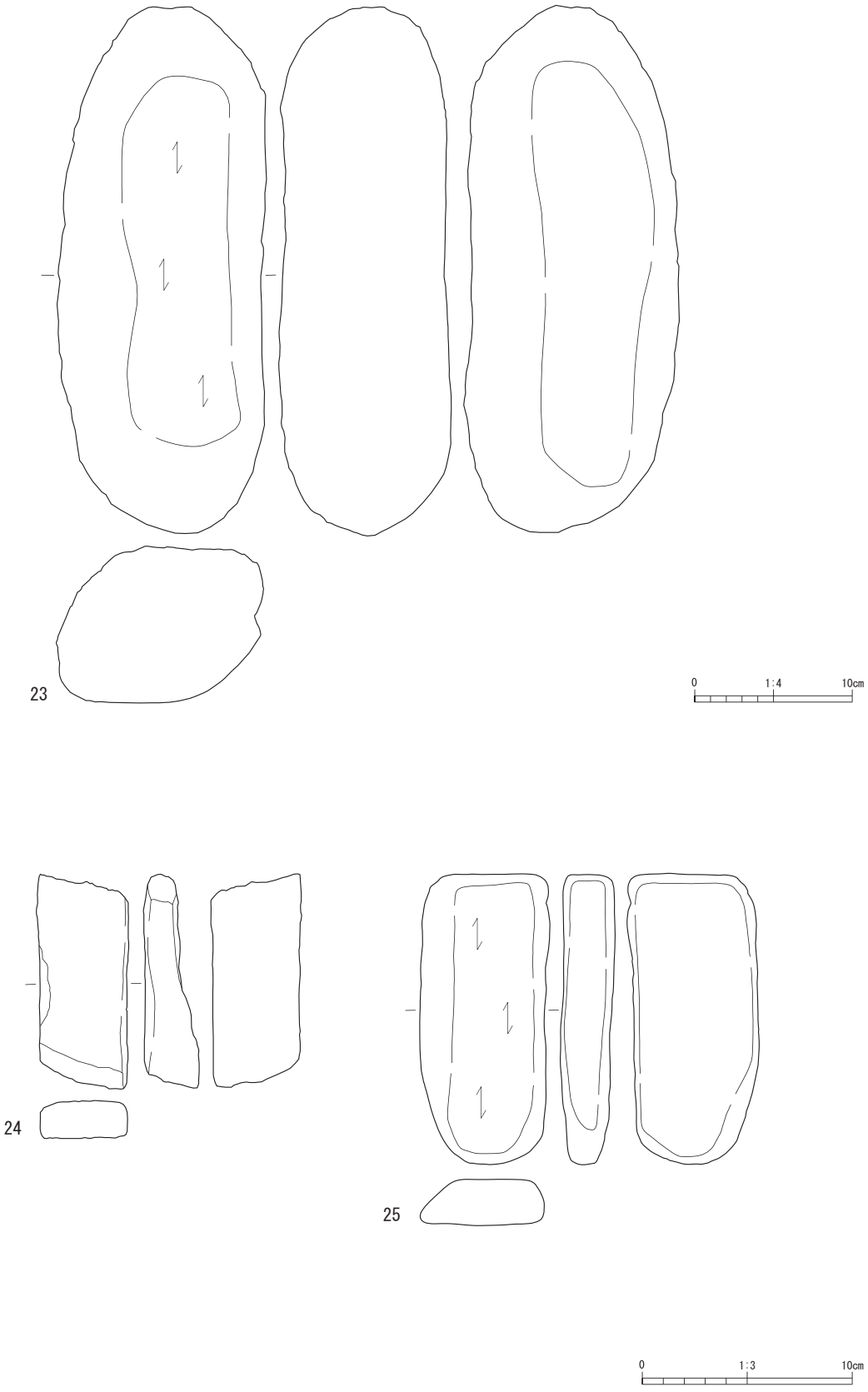
礫の集合がSB1及びSB2それぞれから出土しており、SB1からは９点、SB2からは21点確認されている。この集石にある礫は製作の際の痕跡や使用の際の痕跡が観察できないため自然礫との区別が困難である。このため、観察表及び写真で報告としたい。全体30点について長幅比を散布図にしたところ第28図のようになった。分布は最大長６～10㎝、最大幅４～７㎝に大部分がおさまる。また、重量の平均値は220.15ｇで標準偏差は75.41である。



第28図　集石長幅比



第29図　石製品（その１）



第30図　石製品（その２）

第７表　栄町遺跡出土土器観察表

No.	遺構名	出土位置	種別	器種	残存部位	口径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	最大径部位	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴 外面	技法の特徴 内面	技法の特徴 底部
1	SB1	カマド	土師器	高坏	脚部	不明	－	不明	不明	－	(10.1)	不明	ナデ	－
2	SB1	カマド	土師器	甕D	口縁部～体部下半	16.7	14.0	16.7	口縁部	不明	(29.5)	ナデ	ナデ	不明
3	SB1	床面	土師器	甕A1	口縁部～体部下半	15.8	16.2	28.2	体部	不明	23.2	不明	不明	不明
4	SB1	覆土	須恵器	不明	体部上半～体部下半	不明	不明	17.5	体部	不明	12.6	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
5	SB1	覆土	土師器	坏B	口縁部～体部下半	14.4	－	14.4	口縁部	不明	(4.5)	ナデ	ミガキ	不明
6	SB1	覆土	土師器	甕	口縁部～体部上半	18.8	16.8	不明	不明	不明	(7.5)	ナデ	ナデ	不明
9	SB2	床面	土師器	甕A1	口縁部～体部上半	19.0	17.1	(37.0)	(体部)	不明	(16.3)	ナデ	ナデ	不明
10	SB2	カマド	土師器	甕D	口縁部～底部	19.8	16.8	20.2	体部	5.0	36.4	ミガキ	ナデ＋ミガキ	木葉痕＋ナデ
11	SB2	カマド	土師器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	5.5	(6.9)	ナデ	ナデ	木葉痕＋ナデ
12	SB2	カマド	土師器	甕D	口縁部～底部	15.8	15.0	18.7	体部	5.0	25.0	ナデ	ナデ	不明
13	SB2	カマド	土師器	甕D	口縁部～底部	17.6	16.4	18.2	体部	5.8	22.4	ナデ	ナデ	木葉痕
14	SB2	カマド	土師器	甕D	口縁部～体部上半	16.5	15.5	(19.0)	(体部)	不明	(8.7)	ナデ	ナデ	不明
15	SB2	カマド	土師器	甕A	口縁部～底部	11.6	10.6	16.1	体部	4.1	13.1	ミガキ	ミガキ	ナデ
16	SB2	覆土	須恵器	坏蓋H	体部	不明	－	不明	不明	－	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	－
17	SB2	覆土	須恵器	高坏	脚部	不明	－	不明	不明	－	(3.8)	ロクロナデ＋波状文	不明	－
18	SB2	覆土	土師器	甕D	口縁部～底部	14.4	13.5	14.9	体部	5.6	17.5	ナデ＋ミガキ	ナデ	木葉痕
19	SB2	覆土	土師器	甕D	口縁部～底部	19.8	17.6	22.1	体部	6.0	34.4	ナデ＋ミガキ	ナデ	木葉痕＋ナデ
20	SB2	覆土	土師器	甕A1	口縁部～体部下半	21.5	20.8	(33.2)	体部	不明	(24.3)	ミガキ	ナデ	不明
21	包含層	覆土	須恵器	坏蓋	体部	不明	－	不明	不明	－	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	－

(　　) は残存している部分の法量。

第８表　栄町遺跡出土土製品観察表

No.	遺構名	出土位置	種　別	名　称	直径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	技法の特徴
7	SB1	覆土	土製品	紡錘車	4.0	2.7	19.7	孔径0.8cm
8	SB2	覆土	土製品	紡錘車	3.8	3.2	14.6	

第９表　栄町遺跡出土石製品観察表

No.	遺構名	出土位置	名称	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(kg)	技法の特徴
22	SB2	床面	砥石	62.1	24.5	15.2	28.0	
23	SB2	床面	砥石	33.0	12.9	10.9	7.5	
24	SB2	床面	砥石	10.2	4.4	2.6	0.1	
25	SX1	覆土	砥石	13.8	6.1	2.3	0.4	

第10表　栄町遺跡出土集石観察表

No.	遺構名	出土位置	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	備　考
1	SB1	床面	礫	9.4	6.1	284.5	
2	SB1	床面	礫	12.7	7.2	515.2	
3	SB1	床面	礫	9.3	5.6	262.5	
4	SB1	床面	礫	8.4	6.5	276.1	
5	SB1	床面	礫	9.4	4.8	204.3	
6	SB1	床面	礫	7.4	7.4	204.2	
7	SB1	床面	礫	7.3	5.6	231.6	
8	SB1	床面	礫	8.7	5.0	239.3	
9	SB1	床面	礫	7.6	4.9	102.0	
1	SB2	床面	礫	6.7	5.4	213.8	
2	SB2	床面	礫	6.5	3.6	45.5	
3	SB2	床面	礫	7.8	7.1	206.4	
4	SB2	床面	礫	8.5	4.8	200.1	
5	SB2	床面	礫	7.7	5.0	99.9	
6	SB2	床面	礫	9.5	5.4	188.4	
7	SB2	床面	礫	7.7	4.4	210.5	
8	SB2	床面	礫	9.7	5.6	208.8	
9	SB2	床面	礫	8.2	4.6	227.6	
10	SB2	床面	礫	9.4	5.5	210.4	
11	SB2	床面	礫	8.8	5.7	181.7	
12	SB2	床面	礫	7.7	5.4	207.9	
13	SB2	床面	礫	9.3	5.0	258.2	
14	SB2	床面	礫	7.7	5.2	246.6	
15	SB2	床面	礫	8.3	5.8	237.1	
16	SB2	床面	礫	8.3	6.1	243.6	
17	SB2	床面	礫	9.8	5.7	242.1	
18	SB2	床面	礫	7.5	5.6	203.1	
19	SB2	床面	礫	10.7	5.0	246.8	
20	SB2	床面	礫	7.5	4.1	192.6	
21	SB2	床面	礫	8.6	5.7	213.7	

７　自然科学分析

栄町遺跡（第４次）発掘調査では、各竪穴建物跡から出土した炭化物を用いて、自然科学的手法により放射性炭素年代測定（AMS 法）及び樹種同定を実施した。

明科遺跡群栄町遺跡（第４次）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

栄町遺跡（長野県安曇野市明科中川手地内）は、犀川の右岸に形成された河岸段丘上、会田川の開析によって画された南側の段丘面上に立地する。今回の調査区に近接する第３次調査地点の発掘調査の結果、古墳時代後期を主体とする集落であることが確認されている（安曇野市教委2013）。今回の第４次調査においても、古墳時代後期の竪穴建物跡２軒が検出され、当該期の集落の広がりが明らかとなっている。

本報告では、上記した古墳時代後期の竪穴建物跡のうち、炭化材が多く出土した遺構の年代、出土炭化材の樹種及び木材利用の検討を目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施した。

１　試料

試料は、栄町遺跡第４次調査（SC12）の竪穴建物跡（SB2）の床面やカマド、カマド付近より出土した炭化物４点（サンプル１～４）である。これらの試料の観察では、サンプル１（SC12 SB2 床面炭化物①）が灰白色～褐灰白色泥質砂の表面に付着した厚さ約１～２㎜程度の炭化物、サンプル２（SC12 SB2 カマド 炭化物）が（柾目）板状を呈する炭化材の小破片（長さ約2.5㎝、幅約１㎝、幅約0.5㎝）、サンプル３（SC12 SB2 カマド北 炭化物）及びサンプル４（SC12 SB2 SE 区 床面）はいずれもサンプル１と同様の土塊表面に厚さ数㎜程度に付着する炭化物であることが確認された。

上記した試料のうち、土塊表面に炭化物が付着する試料３点（サンプル１、３、４）については組織観察（樹種同定）用として破片を採取した後、残る炭化物を放射性炭素年代測定に供した。また、破片試料（サンプル２）については、同一試料を分割し、それぞれの分析に供した。

２　分析方法

⑴　放射性炭素年代測定

試料は、目的物と異なる年代を持つもの等が付着、あるいは混入している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2を精製する。真空ラインにてバイ

コール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いてδ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68％）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1［Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer］を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、１年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差σ、２σ（σは統計的に真の値が68％、２σは真の値が95％の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

⑵　樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

３　結果

⑴　放射性炭素年代測定

SB2より出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、サンプル１（SC12 SB2 床面炭化物①）が1,610±20yrBP、サンプル２（SC12 SB2 カマド 炭化物）が1,480±20yrBP、サンプル３（SC12 SB2 カマド北 炭化物）が1,550±20yrBP、サンプル４（SC12 SB2 SE 区床面 炭化物）が1,500±30yrBP である。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果（１σ）は、サンプル１が calAD 401-calAD 528、サンプル２が calAD 564-calAD 604、サンプル３が calAD 432-calAD 546、サンプル４が calAD 549-calAD 596を示す（第11表）。

第11表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	δ^{13}C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)		暦年較正結果	相対比	測定機関 CodeNo.
サンプル１ SC12 SB2 床面炭化物①	1,610±20	−20.87±0.25	1,614±20	σ	cal AD 401 − cal AD 430 cal BP 1,549 − 1,520	0.614	IAAA-132704
					cal AD 493 − cal AD 510 cal BP 1,457 − 1,440	0.239	
					cal AD 518 − cal AD 528 cal BP 1,432 − 1,422	0.147	
				2σ	cal AD 393 − cal AD 438 cal BP 1,557 − 1,512	0.507	
					cal AD 444 − cal AD 473 cal BP 1,506 − 1,477	0.092	
					cal AD 486 − cal AD 535 cal BP 1,464 − 1,415	0.401	
サンプル２ SC12 SB2 カマド 炭化物	1,480±20	−27.48±0.34	1,483±20	σ	cal AD 564 − cal AD 604 cal BP 1,386 − 1,346	1.000	IAAA-132705
				2σ	cal AD 545 − cal AD 625 cal BP 1,405 − 1,325	1.000	
サンプル３ SC12 SB2 カマド北 炭化物	1,550±20	−21.92±0.26	1,549±20	σ	cal AD 432 − cal AD 489 cal BP 1,518 − 1,461	0.791	IAAA-132706
					cal AD 532 − cal AD 546 cal BP 1,418 − 1,404	0.209	
				2σ	cal AD 428 − cal AD 499 cal BP 1,522 − 1,451	0.639	
					cal AD 502 − cal AD 560 cal BP 1,448 − 1,390	0.361	
サンプル４ SC12 SB2 SE 区床面 炭化物	1,500±30	−28.02±0.66	1,499±25	σ	cal AD 549 − cal AD 596 cal BP 1,401 − 1,354	1.000	IAAA-133567
				2σ	cal AD 436 − cal AD 446 cal BP 1,514 − 1,504	0.012	
					cal AD 472 − cal AD 486 cal BP 1,478 − 1,464	0.022	
					cal AD 535 − cal AD 635 cal BP 1,415 − 1,315	0.966	

(2)　樹種同定

同定結果を第12表に示す。竪穴建物跡（SC12 SB2）から出土した炭化材は、カマド 炭化物（サンプル２）と SE 区床面 炭化物（サンプル４）の２点が広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。なお、床面炭化物①（サンプル１）とカマド北 炭化物（サンプル３）の２点は、いずれも広葉樹と判断されたが、収縮等が著しく、道管配列や放射組織の形態等が観察できなかったため、種類の特定には至らない。以下に、確認された分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*）ブナ科

試料は、年輪界部分で割れており、早材部のほとんどを欠くが、年輪界に僅かに残る早材部の道管径から、環孔材と判断される。孔圏外の小道管は、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

第12表　樹種同定結果

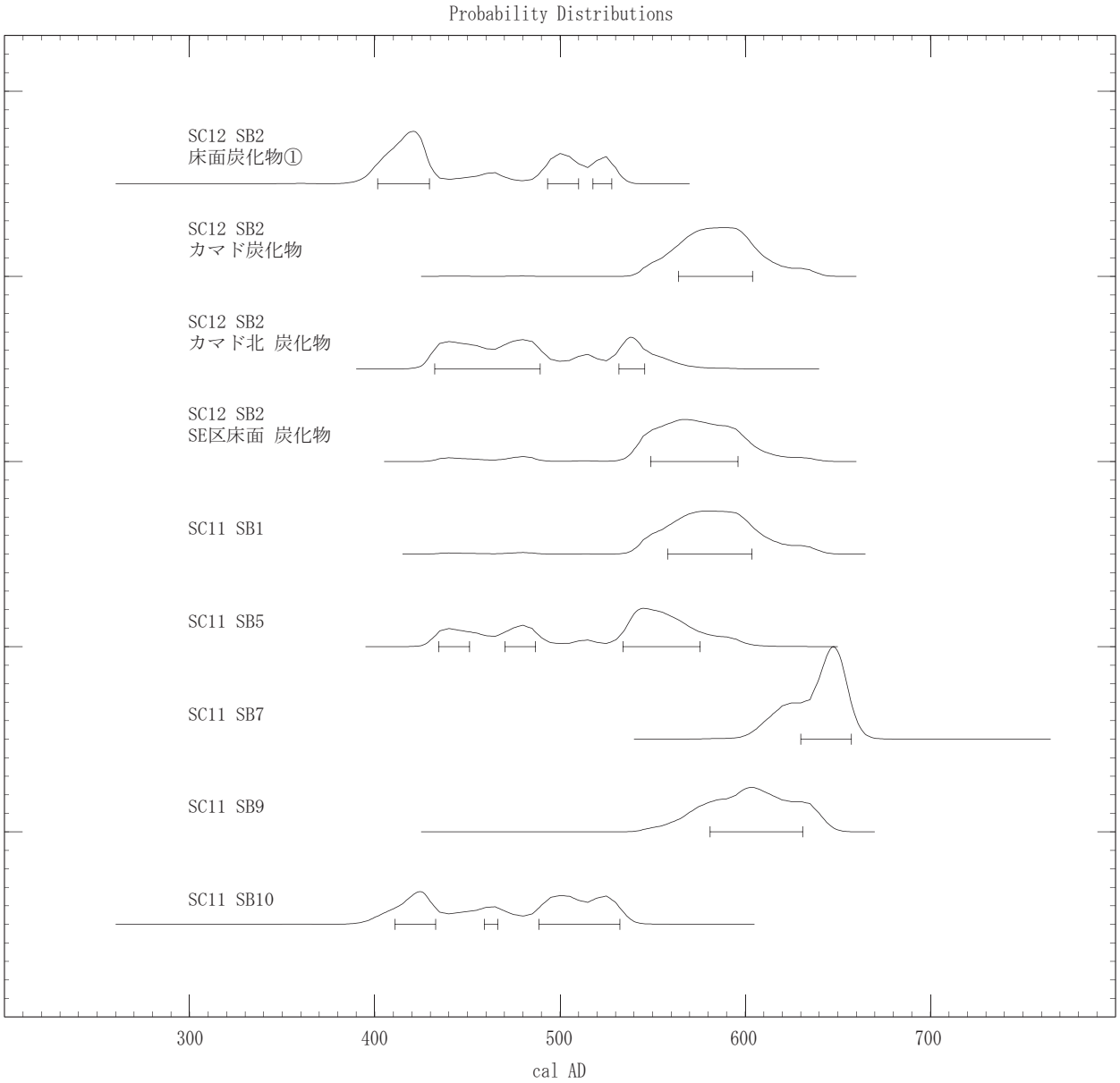
No.	遺構名	地点名・試料名	形　状 (状態)	種　類 (分類群)
1	SC12 SB2	床面 炭化物①	(土塊表面に付着)	広葉樹
2	SC12 SB2	カマド 炭化物	破片（柾目板状）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	SC12 SB2	カマド北 炭化物	(土塊表面に付着)	広葉樹
4	SC12 SB2	SE 区床面 炭化物	(土塊表面に付着)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

４　考察

⑴　遺構の年代

竪穴建物跡（SC12 SB2）の床面やカマド、カマド付近から出土した炭化物は、上記した暦年較正結果（以下、暦年代）を参考にすると、５世紀初頭頃から７世紀初頭頃までの範囲を示した。詳細にみると、床面炭化物①とカマド北 炭化物（サンプル１、３）等の５世紀代から６世紀中頃までの暦年代を示す試料と、カマド炭化物とSE区床面 炭化物（サンプル２、４）等の６世紀中頃から７世紀初頭前後までの暦年代を示す試料とに分けられる。

なお、本遺跡では第３次調査で検出された竪穴建物跡においても出土炭化材を対象に放射性炭素年代測定が実施されている。これらの結果を含めた暦年較正結果（１σ）（第31図）をみると、若干古い暦年代を示す試料が含まれるが、おおむね６世紀後半から７世紀中頃までの暦年代範囲にある試料が多いという傾向が窺える。



栄町遺跡第３次調査（SC11）は安曇野市教育委員会（2013）を参考とし、暦年較正にはCALIB REV7.0.1を使用した。

第31図　暦年較正結果（１σ）

⑵　木材利用

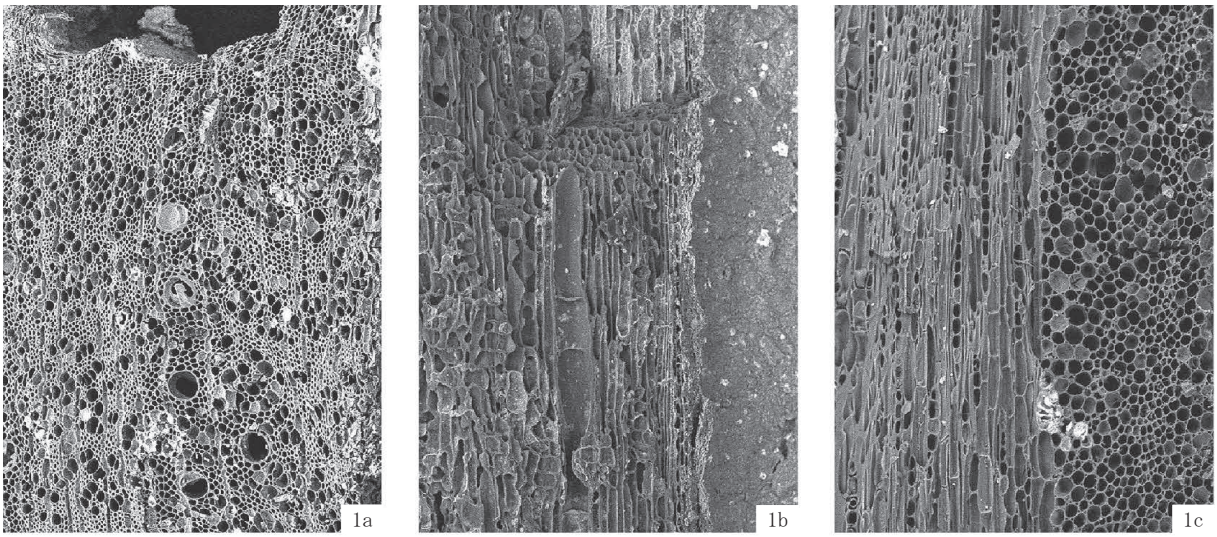
竪穴建物跡（SC12 SB2）から出土した炭化材には、広葉樹のクヌギ節と種類の特定に至らない広葉樹が確認された。クヌギ節には、クヌギとアベマキの２種が含まれる。いずれも二次林や川辺等に生育する落葉高木であり、山地より人里周辺に生育する。また、クヌギ節の木材は、重硬で強度が高い。

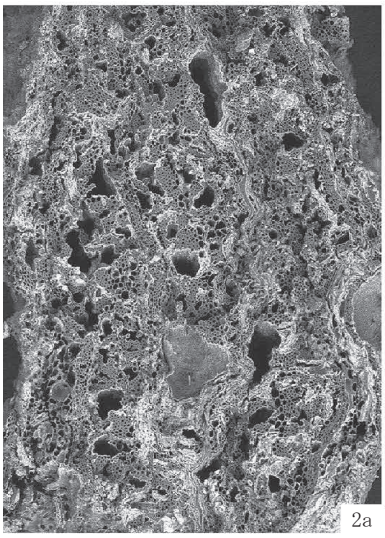
分析に供された炭化材の出土地点についてみると、建物跡の床面とカマドとに分けられる。クヌギ節は、床面及びカマドより出土していることから、建築部材や燃料材等として利用されたと考えられる。

栄町遺跡では、第３次調査で検出された竪穴建物跡より出土した炭化材について分析が実施されており、針葉樹のマツ属複維管束亜属、ヒノキ科、広葉樹のクヌギ節、カエデ属等が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社2013）。建物跡単位での詳細な木材利用は不明であるが、広葉樹材は強度の高い分類群、針葉樹材は加工が容易な分類群から構成されるという傾向が窺える。今回の竪穴建物跡（SC12 SB2）にクヌギ節が認められた状況は、上記した木材利用を追認する結果と言える。

引用文献

安曇野市教育委員会，2013，平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書　明科遺跡群古殿屋敷（第１次）明科遺跡群栄町遺跡（第３次），安曇野市の埋蔵文化財第６集，118p.
林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．
伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.
伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.
伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.
伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.
伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.
パリノ・サーヴェイ株式会社，2013，６自然科学分析．平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書　明科遺跡群古殿屋敷（第１次）明科遺跡群栄町遺跡（第３次），安曇野市の埋蔵文化財第６集，89-94.
島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.
Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.





100μm:a
100μm:b, c

1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（SC12 SB2 カマド炭化物;2）
2. 広葉樹（SC12 SB2 カマド北炭化物;3）
　a:木口, b:柾目, c:板目

第32図　炭化材

８　調査の総括

今回の発掘では古墳時代後期の集落跡を調査し、２軒の竪穴建物跡が確認された。今回の調査地点は明治期以降、工場用地等に利用されてきたが、遺構の残存状況は良好であり、過去の発掘調査成果と併せて栄町遺跡における集落域の範囲が明らかになってきたといえる。

遺構の帰属時期について

栄町遺跡第３次・第４次発掘調査で出土した土器類について、遺構ごとに出土数を集計した結果を第13表に示した。第４次調査で出土した土器類は、床面直上及びカマドに帰属して出土したものを中心に資料化しており、各遺構廃絶時期を推定することがある程度可能と考えられる。ただし、第４次調査出土土器の特徴として、いずれの遺構からも須恵器がほとんど出土していない点、土師器も甕を主体としており坏類等がほとんど出土していない点があげられる。このため、土師器のみによる遺構の帰属時期決定は大きな年代幅で捉えることとならざるをえない。

なお、第３次発掘調査報告と同様に時期区分として土師器類型で参考にした榎田遺跡古墳時代中期から後期のⅠ～Ⅴ期区分を念頭におく（長野県埋文センター1999、安曇野市教委2013）。

SB1のカマド・床面からは胴部が球形を呈する土師器甕 A1及び長胴の土師器甕Ｄが出土している。また、覆土からは内面黒色処理の土師器坏Ｂが出土しているため、本遺構の下限をⅤ期と考えたい。

SB2からは多くの土師器甕類が出土した。これらのほとんどはカマド周辺からの出土であり、遺構廃絶時にカマド周辺に残されていたような出土状況であった。類型としては胴部球形の甕Ａと長胴の甕Ｄがみられている。甕Ｄは外面ミガキ調整が顕著である。また、SB2出土甕Ｄの胴部最大径はいずれも胴部上半で底部はすぼまるような形態であり、類型の中では新しい様相と考えられる（松本市教委1989）。本遺構からは、坏類等が出土していないため詳細な時期の絞り込みは困難であるが、SB1と併行すると考えられる。

なお、第４次調査では遺構間接合する土器類は確認されていない。

次に放射性炭素年代測定による暦年較正結果（１σ）によると、測定試料が採取できたのはSB2のみで、床面採取炭化物やカマド北採取炭化物は５～６世紀を示しているが、カマド内採取炭化物は６～７世紀を示す。同一遺構から採取された試料であることを考慮すると、カマド内採取試料の示す年代が遺構廃絶年代に最も近い可能性がある。なお、第４次調査 SB2と同時期の炭化物が確認されている遺構としては第３次調査の SB1及び SB9、６世紀後半を示す遺構としては SB5、７世紀中葉を示す遺構としてはSB7覆土４層上部があげられる（第31図）。

調査の成果と今後の課題

今回の調査では竪穴建物跡２棟を確認した。この建物跡は現在までの栄町遺跡発掘調査では最も東で確認された竪穴建物跡である。このため、集落が今回の調査区よりも東に広がることが明らかとなった。また、放射性炭素年代測定の結果から今回確認されたSB2が第３次発掘調査で確認された集落跡と同時期に存在することが判明した。

第13表　栄町遺跡出土土器遺構別集計表

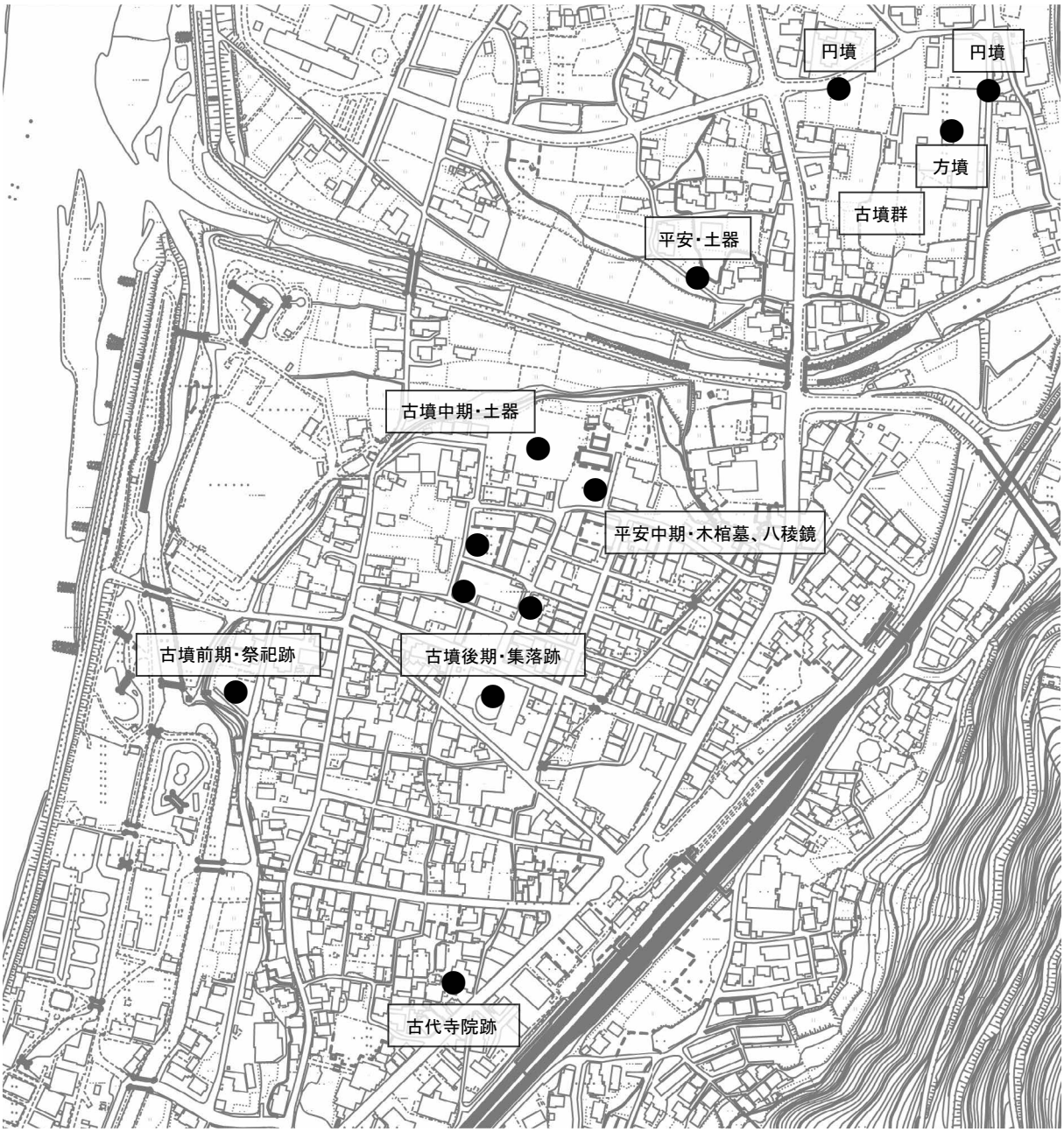
		第３次										
		SB1		SB2		SB3	SB5		SB6		SB7	
種別	器種	床カマド	覆土	床カマド	覆土	覆土	床カマド	覆土	床カマド	覆土	床カマド	覆土
須恵器	坏A				1							11
	坏B											3
	坏G								1	1		1
	坏H											
	坏蓋A		1									6
	坏蓋B											3
	坏蓋H											
	蓋									1		
	鉢											1
	鉢？		1							1		
	高坏									1		
	すり鉢									1		1
	甕A											1
	短頸壺									1		
	壺			1								
	瓶											
	不明											
須恵器 集計			2	1	1				1	6		27
土師器	坏 A3	1										
	坏B		2	2	1		1	1		4		1
	坏 D2										1	
	鉢											
	鉢？											
	鉢A	1										
	鉢 A1				1		1					
	鉢 B2											
	鉢 B2											
	鉢 B3		1	1	1							2
	高坏									1		
	高坏？											
	高坏 I											
	高坏L			1								
	甕			1		1					1	
	甕A	1										
	甕 A1											
	甕 A3											
	甕B	1										
	甕 C1	1										
	甕 C2											
	甕D	2		1			1					2
	甕F											
	甑B											
	甑C											
	甑C？										1	1
	ミニチュア								2	1		1
土師器 集計		7	3	6	3	1	3	1	2	6	3	7
総計		7	5	7	4	1	3	1	3	12	3	34

第３次											第４次			
SB8		SB9		SB10		SB11	SB12		SB14	SB15	SB1		SB2	
床カマド	覆土	床カマド	覆土	床カマド	覆土	覆土	床カマド	覆土	覆土	床カマド	床カマド	覆土	床カマド	覆土
								1						
		1	2	1										
						1		3						
														1
1														
		1												1
							1							
		1												
	1				1									
												1		
1	1	3	2	1	1	1	1	4				1		2
				1										
		1	3					1				1		
	1			1										
				1										
										1				
								1						
		1		1										
		1												
1								1			1			
			1											
							1							
		1		1			1							
1		2					1					1	1	
													1	
							1				1		1	1
					2									
					1									
			1	2			1	1	1	1	1		4	2
							1							
		1												
					1									
				1				1						
2	1	7	5	8	4		6	5	1	2	3	2	7	3
3	2	10	7	9	5	1	7	9	1	2	3	3	7	5

また、以下に今後の課題とされる事項について記載する。

まず一つめの課題は、一帯における集落の変遷についてである。栄町遺跡の現在までの発掘調査で確認された遺構は概ね古墳時代後期に属すると考えられている。しかし、栄町遺跡に北接する古殿屋敷からは、試掘調査で古墳時代中期の土器が出土しており、この時期の集落も明科遺跡群内に存在する可能性が高い。このため、本遺跡周辺での古墳時代における中期から後期、さらに奈良時代にかけての集落変遷の解明について継続的に調査する必要がある。

続いて二つめの課題は、遺構の詳細時期決定についてである。栄町遺跡第４次発掘調査では竪穴建物跡から須恵器や土師器坏類といった詳細な時期決定の参考となる土器類は出土しなかった。栄町遺跡における古墳時代集落の継続年代の下限は、本遺跡南方に所在する明科廃寺創建期と併行関係にあるため、今後の発掘調査でも、遺物・遺構の編年と自然科学分析を併用して総合的に検討する必要がある。



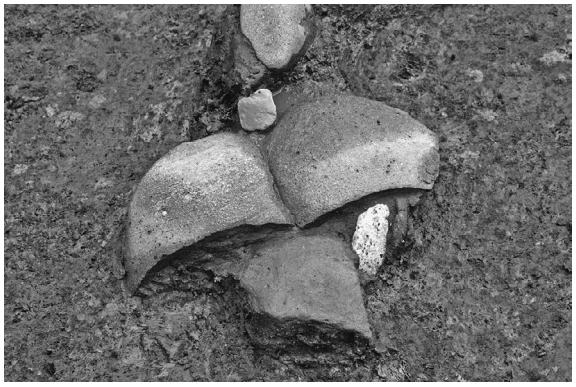
第33図　栄町遺跡付近の遺構確認・遺物出土地点

調査区遠景（北西から）

遺構検出状況（西から）

SB1検出状況（北西から）

SB2検出状況（北から）



SB1遺物出土状況

SB1遺物出土状況

SB1遺物出土状況

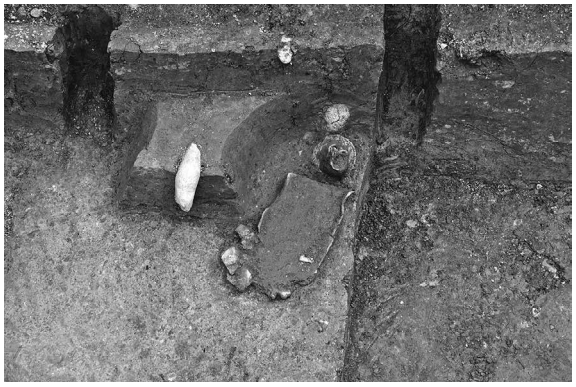
SB1砂岩出土状況

SB2遺物出土状況

SB2遺物出土状況

SB2遺物出土状況

SB2遺物出土状況



SB1カマド調査状況（西から）

SB1カマド調査状況（南西から）

SB1カマド調査状況（南から）

調査区南壁深掘り（北から）

SB2遺物出土状況

SB2遺物出土状況

SB2遺物出土状況

SB2遺物出土状況

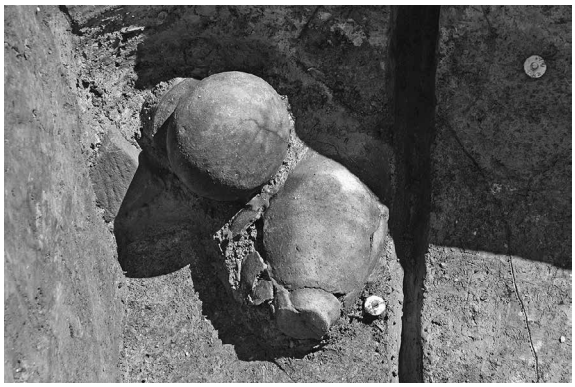
SB2床面炭化物出土状況

SB2床面炭化物出土状況

SB2床面集石

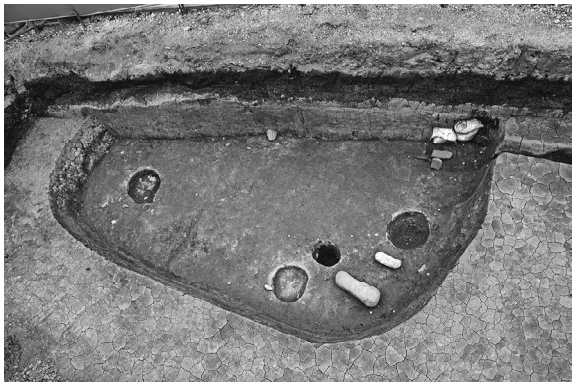
SB2カマド調査状況（西から）

SB2カマド調査状況（南西から）



SB2カマド遺物出土状況

SB1完掘状況（西から）



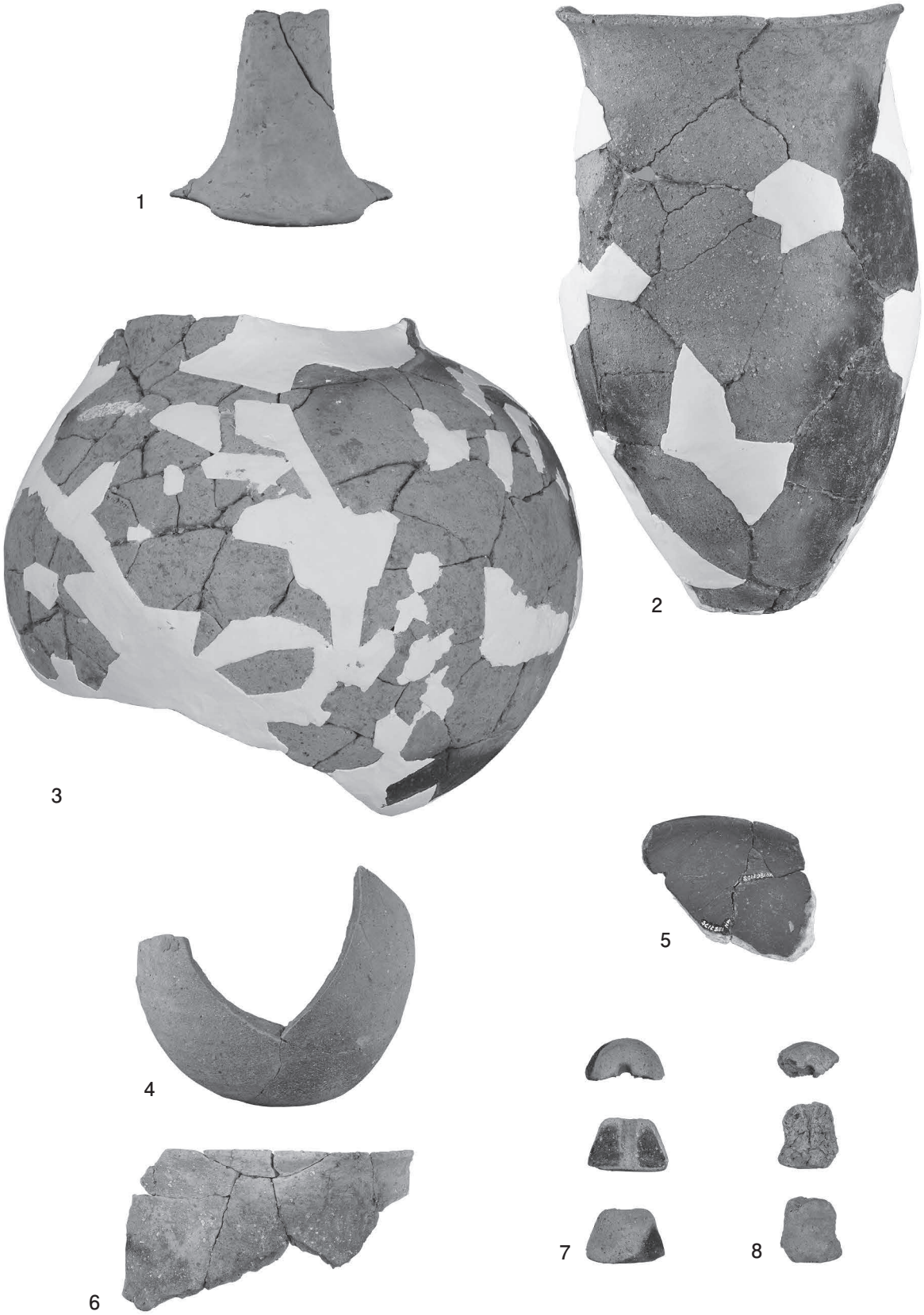
SB2完掘状況（南から）

完掘状況（西から）

完掘状況（南東から）

調査区空撮（上が北）

調査終了後（北西から）



SB1出土土器・土製品

9

10

11

12

SB2出土土器

13

14

15

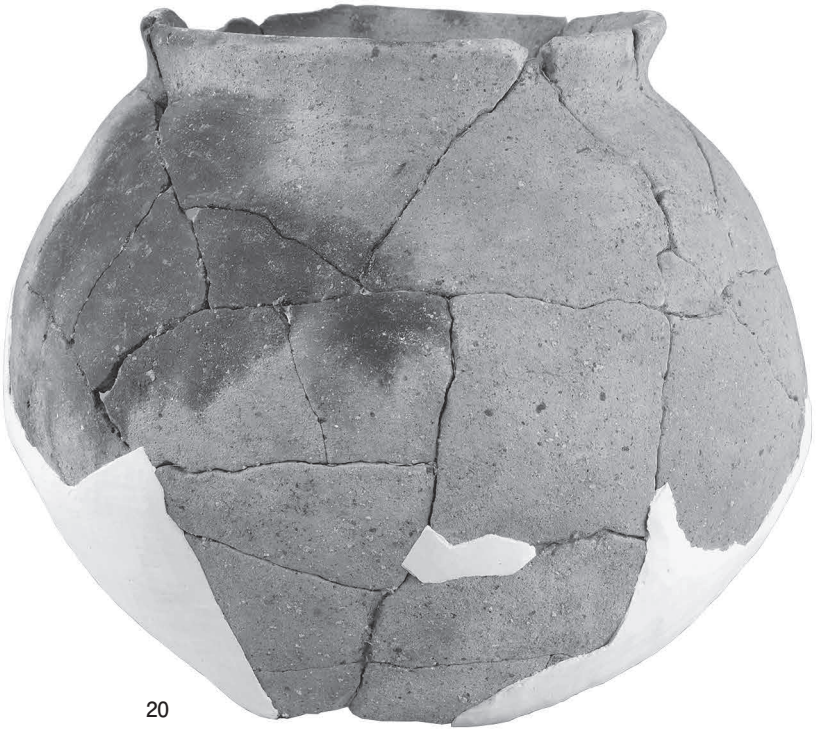
16

17

18

19

SB2出土土器



20

21

SB2出土土器

22

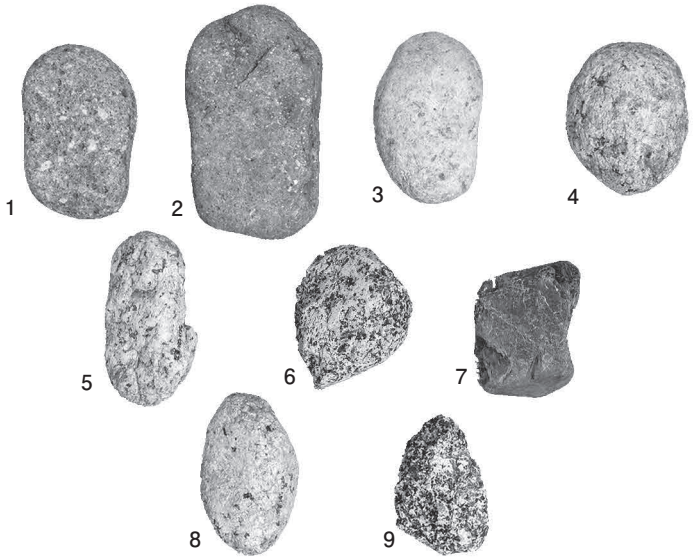
SB2出土石製品

23

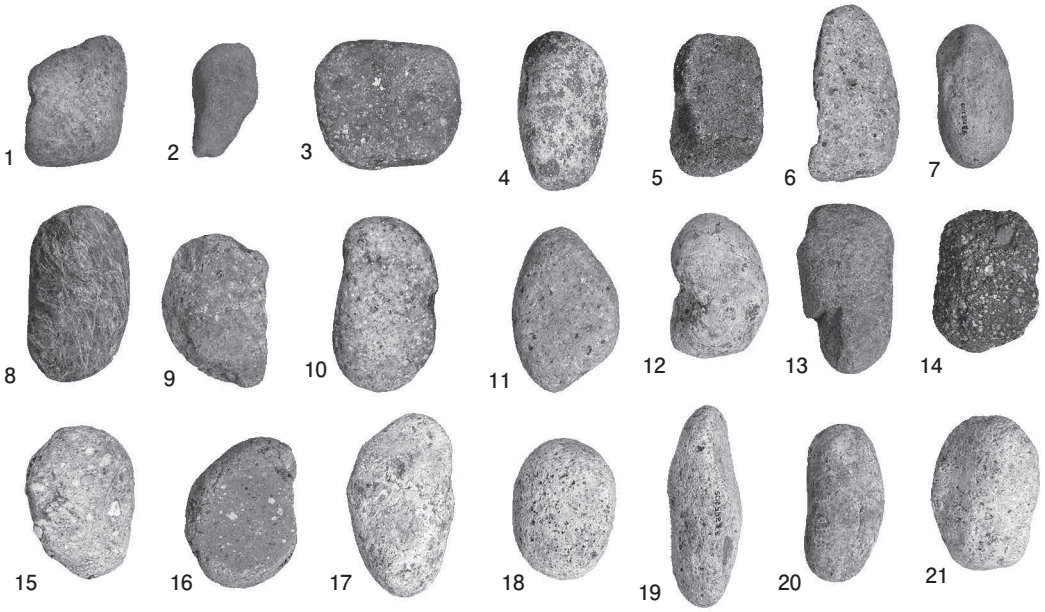
24

25

SB2・SX1出土石製品



SB1出土集石



SB2出土集石

引用・参考文献（五十音順）

明科町史編纂会　1984 『明科町史　上巻』 明科町史刊行会

明科町史編纂会　1985 『明科町史　下巻』 明科町史刊行会

明科町教育委員会　1979 『長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書』 明科町教育委員会

明科町教育委員会　1991 『ほうろく屋敷遺跡―川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』明科町の埋蔵文化財第３集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　1997 『塩田若宮遺跡―明科町立明北小学校体育館建て替え工事に伴う緊急発掘調査報告―』明科町の埋蔵文化財第10集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2000 『明科廃寺址―個人住宅建替えに伴う緊急発掘調査報告書―』明科町の埋蔵文化財第７集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2001 『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ―個人住宅建築工事に伴う第４次緊急発掘調査報告―』明科町の埋蔵文化財第11集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2002 『栄町遺跡―「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査―』明科町の埋蔵文化財第６集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2004 『上手屋敷遺跡第２次調査―町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書―』明科町の埋蔵文化財第12集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ―町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書―』明科町の埋蔵文化財第13集　明科町教育委員会

安曇野市教育委員会　2010 『平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書―八ツ口遺跡・三枚橋遺跡―』安曇野市の埋蔵文化財第３集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2011 『平成21年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書―塩田若宮遺跡（第２次）―』安曇野市の埋蔵文化財第４集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2013 『平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第６集　安曇野市教育委員会

太田喜幸、河西清光　1966 「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ケ丘遺跡調査」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』 長野県考古学会　pp.139-156

長野県埋蔵文化財センター　1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書４　長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター　1993 『北村遺跡―中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11（明科町内）―』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14　長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター　1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12―長野市内その10―榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37　長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター　2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28―更埴市内その７―更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54　長野県埋蔵文化財センター

長野県編　1988 『長野県史　考古資料編　全１巻⑷遺構・遺物』 長野県史刊行会

松本市教育委員会　1989 『松本市千鹿頭北遺跡―県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』松本市文化財調査報告 No.69　松本市教育委員会

松本市教育委員会　1994 『出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告 No.115　松本市教育委員会

吉田恵二、中村耕作編　2013 『長野県安曇野市穂高古墳群2012年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第48集　國學院大學文学部考古学研究室

報告書抄録

ふりがな	へいせい24ねんどあづみのしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	明科遺跡群栄町遺跡（第４次）
巻次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第７集
編著者名	土屋　和章、山下　泰永、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-7102　長野県安曇野市明科中川手2914番地1　　TEL0263-62-3090
発行年月日	西暦2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °’”	東経 °’”	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
明科遺跡群 栄町遺跡	長野県安曇野市明科中川手6812番７	20220	5-411	36° 21’ 22”	137° 55’ 45”	20120901 ～ 20121005	120㎡	公共施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
明科遺跡群 栄町遺跡	集落	古墳時代	竪穴建物跡２、ピット	須恵器、土師器、土製品	古墳時代後期の集落跡で竪穴建物跡等を調査。

要約	栄町遺跡第４次発掘調査では、120㎡の調査範囲から古墳時代後期の竪穴建物跡２軒を検出し調査した。いずれもカマド付近から良好な土師器甕類が出土したが、須恵器や土師器坏等はほとんど出土していない点が特徴的である。今回の調査区は、現在までの栄町遺跡の発掘で最も東に位置しており、当該期の集落がさらに東方まで広がっている可能性があることがわかった。

安曇野市の埋蔵文化財第７集

平成24年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
明科遺跡群栄町遺跡（第４次）

２０１４

発　行　平成26年（2014）３月31日
安曇野市教育委員会
長野県安曇野市明科中川手2914番地１
電話　0263-62-3090
印　刷　藤原印刷株式会社